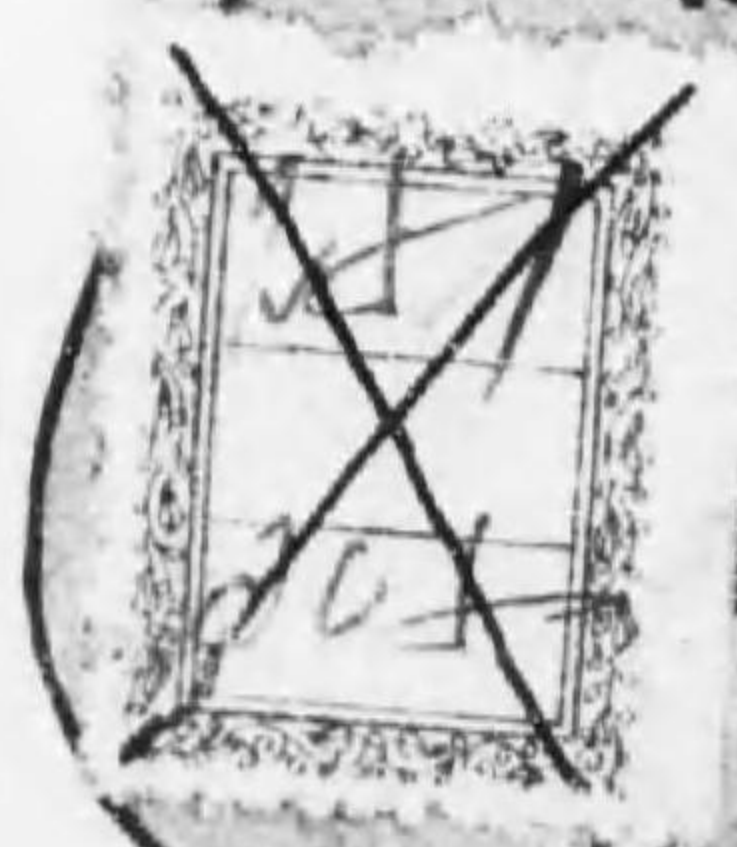




娘ものごふた
好きとゆた

特110
185

奥野他



始



4/110
185

持110
185



娘もの云ふた

好きとゆた



奥野他見男著

大正
8. 11. 28
内交

目次

短刀直入

まア知らないわ
三越で偶然素敵な美人に
愈々直接談判
ハツと答へて出た主こそは
奇縁！奇遇！！
申譯ありません

藤田君の結婚

日本よ、さらば

船は諍かに、故郷よさらば
我輩日本人を捉へて
黒髪よ！香ひよ！！
金髪の少女がニツとして

あな嬉し、喜ばし

一

壹

三

一九

親

.....二二五

初戀の音楽

.....二二七

助かっ てくれ
オーと思はず抱き付いて
どこかで見た様な……
あの顔！あの嬉し相な
戀の喜び！戀の名残！！

快

.....二二八

一痛

人娘

.....二二九

短刀直入

☒ ました知らないわ

あの人は近頃何うしてゐるだらう？ 或日フイと其慶事を思ふた。あの人は眞木さんのことである。

昨年の暮己れと弟の二人は伊豆の伊東へ旅をした。その時偶然乗り合はしたのが眞木さんである。夫婦に花も欺く令嬢を連れ親水入すの三人連れ、いつしか此方と言葉を交はし、遂に其の長い道中から旅館までズツと行動を共にした。色々語り合つてる裡に此の人は有名な天下の奇行家たることが知れた、趣味は古今に渡つた凡そ變つたものと名の付く物を集めて保存しておくのが無二の楽しみだと云ふ。

僕等はお先きへ失敬して一足先きに伊東から歸つた、その人は猶今年の三月までも滞在してゐた。四月櫻の散る頃弟と二人は谷中のその宅を訪ねた限り

である。そして今日まで御無沙汰してゐたんだ。一度是非お訪ねしたいしたいと云つて先方も御無沙汰してゐた。

己れは久々で訪問して見よう、斯う思ふて家を出たのは夕頃七時の針を廻つた許りの時であつた。

「御免下さい」と眞暗な玄關に立つて己れは案内を乞ふた。「ハイ」と優しい聲が直ぐ奥の方から聞えた、その聲を聞くと同時に「ハ、ア嬢さんだナ」と思ふた。眞暗で顔はよく分らなかつたが、出て來た姿のそれで早くも矢つ張り嬢さんだと見當が附いた。

先方も勿論、來客とは知りつゝも其の來客の誰れかは全然見當が附かなかつたらしい。彼女は慇懃極まる丁寧なる御辭儀を先づ眞黒なお客さまに呈した、お母アさんの育て方がいゝぞとお客さまたる己れは感心の微笑を一寸湛えて、「御主人さまは御在宅で御座いますか」と悉皆猫を被つた聲を出す。

「ハア、どなた様で御座いますか」と音聲極めて明瞭、聊かのよどみもない甲種合格聲で、流石はお江戸育ちの嬢さんだ、しつかりした應對振り、秘藏娘として出来がいぞ。

「アノ西川さんと云ふお方が被居いましたと通じて下さい。」

すると、嬢さんは俄かに鹿爪らしゆ應對したのが氣恥かしくなつたと見えて「アラ」と袖で口元を壓へて、

「まア——、知らないわ」と、駈ける様に奥へ飛んで行つて、

「かアさん、わたし悉皆欺されたわ。父うさん西川さんが被居いました。」

「西川さん？ オウ之は珍らしい」と奥の方での一問一答手に取る如く聴えて来る。

「やア、これは、これは、どうぞ」と主人公自ら玄關に出馬して手を執らむ許りにする、その後で嬢さん「どなたかと思ふて私し眞面目に挨拶したの、する

と西川さんと云ふお方がだつて。ヒドイわ」と云ひながら、悉皆一本參つたので氣極りが悪いやら恥かしいやらでキツキツ云つて御座る。

「それぢや」と云ひながら座敷へ通る。

「弟さんは？」

「故郷へ歸りました」

「故郷と云ふと？」

「金澤です」

「ハ、ア百万石ですか、前田候ですナ。」

「ハ、ア」

所へ奥様が「まアよくこそ」、お老婆さんが「まアよくこそ」最後に下女までが「まアよくこそ」、その度に己れの首と手は働いた。一同の揃ふた所で己れは次の様な話をした。

◇三越で偶然素敵な美人に

僕は先日三越へ行つた。洋品部で二つ三つ品物を揃へ、サテ之にしやうか、あれにしやうかと物色してると、フイに後から黙つて肩を叩く者がある。見ると草田工學士だ、草田君許りでなく其の後には美人で評判な淑子夫人が控へてる。

「やアお揃ひで。相變らず夫婦仲がいゝなア」と仰天して見せると、大將スツカリ頭を搔いて「斯う大勢の前で君の其の大聲で冷評かされろと思はず顔が赤くなつて了ふよ、參つた」

「やア奥様か、そんなに離れてゐないでもう少し旦那さまの傍に附着てるたまへ。いつ見ても鶏群の一鶴と云ふ美しさだナ、」

「もう西川さん御免よ、お口の悪い。久子さん何うして？」

「妹か、今度妊娠で歸つて來た」

「まア早や大きいの？ 早いわねえ」

「今の若いものは早い、確か貴女も早かつた様に記憶してゐる。」

「そんな話らんことなんか記憶して戴かなくてもいゝわ」と云つて、

「西川さんお一人？」と四邊を見廻はす。

「ウン今日は一人」

「ぢや君、僕等と一寸行動を共にして呉れないか、實は妻の着物だの、僕のだの少し買ひたいんだから柄を見てくれ給へ」

「そうよ、西川さんはお上手で評判だから。」と妻君め巧みに煽て上げる。さう云はれると己れだつて悪い氣がしないので「ぢや」と云つて三人一緒に歩き出した。二階へ上がつて「この柄がいゝ、之もいゝ」と、何等の逡巡も與へず買ふものは買はしめ「矢つ張り西川さんは」と又もや讚美の聲を上げ様とするの

を「オイ茶でも飲まう」と素早く打ち消して、ドヤ／＼と休憩室へ入つた。すると窓に面した一隅に年齢の頃十八か九才頃だらう、脊のスラリとした眼の美はしい色の白い鼻の高い一見目立つて綺麗な令嬢が、その母親らしいのと、弟妹と、それに下女の多勢で坐つてゐた。三人の眼は期せずして此の令嬢に漉がれた。

「ちよつと西川君」と草田君は顔を引寄せて、

「美人ぢやないか。」

「ウム」と頷くと、今度は妻君がヂーツと見据えてゐた眼を此方へ向けて、矢つ張り小聲で「美しい方ねえ」と云ふ。

草田君は幾度か小首傾けては沈黙考の體であつたが、聽て「當つて見ようか知ら」と獨言を云ふ。何を呟やいてゐるんだらうと氣にも留めずになると、草田君は斯う云ひ出した。

「實は己れは己れの弟の嫁を探してゐるんだ、成る可くいゝのを見附けたいと思ふてゐたんだが、どうも無い。所が其のお嬢さんなら理想的なんだ、短刀直入當つて見たいと思ふんだが、然しなんだか」と、頭搔く。

「そんな厚顔しいこと。お止しなさいな」と妻君は横から口を出した。

「ちやお前が弟のを選び出す責任を持つか」と草田君は肉迫した。

「それは、でも」

「ちや何も口出しゝてはならん」と、嘴を尖がらしながら、今度は笑顔になつて僕に、

「どうだらう？」と、きた。根が此處奇想天外的なことに多大な興味を持つ己れは「こいつあ面白い」と思ふたので、

「ものは當つて碎けるだ、構はぬ當つて見い、なアに構ふもんか」と、自分のことで無いんだから、壯快がつて薦めた。

「ぢや當つて見る」と彼は急に斷乎たる決心を示したが、急に又グナリとなつて、

「なんだか氣極りが悪い」と首を抱えた。

「平氣ぢやないか」と己れは懸命に煽つた。妻君は顔を掣めた限りである。

「よし分つた、然しどうもあの娘が傍にゐる所でお母アさんに話合つて行くのは調子が悪い、少し形勢を觀望してゐて、機會を見てゐよう」と云ふ。如何にも御尤だ。給仕女が運んで來たお茶に咽喉を濕してユタリと構へて様子を見てゐる。

すると其の裡、そのお母さんたる人はフイと立つた、そして、

「ぢや私が一寸見て來るから、嬢は此處にゐて子供を遊ばせてゐて下さい」

斯う娘に云つてスタ〜と一人で出て行つた、己れは「それッ」と許り草田君をツ、いた。すると草田君は半ば無意識に立上がつて、後から追つ駈ける様に

出て行つた。己れは此の時萬斛の興味を一時に感じて、彼は孰麼風にあのお母アさんに切り出すかを見たさに續いて又草田君の後を追ふた。

見るとお母アさんは何故か非常に急いで行く、草田君の足もそれに應じて早い。そのうちお母アさんは階子段をズン〜下りた。下りて了つてから何處かを物色する様にキツとなつて四方を見渡してゐるが、聽て氣が附いたと見えて、ド〜南の隅へ歩いて行つた、そして其處にゐる番頭の顔を見るが早い、二言三言笑ひ顔で云つたかと思ふと、傍にあつた腰掛けをグイと引寄せて挫つかと腰を下ろした。草田君は今も云ひ出さう、今も云ひ出さうと幾度か近付いたらしいが、今母親が斯う坐り込んで了つたのを見て、暫しボカンとして柱に倚りかゝりながら様子を見守つてゐた。その裡相手は立つた、そして軽い御辭儀を番頭に與へ「どうぞ宜しく」とカラ〜云ひながら再び今度は同じい道を戻つた。「さア今だ」と決心したのか草田君はグン〜近寄つて行つた。が幾度か

口を切り出さうとしては尻込みしてゐるらしい様子がアリ／＼と己れには讀めた。恰度階子段を登りつめたと思ふ瞬間であつた、草田君は到頭口を切つた。

「奥様」

すると、呼ばれた奥様は、オヤ自分が呼ばれたのかと振り返り、それが自分であつたので不審相に相手の顔を見上げた。草田君は如何にも恐縮なんとも申譯がないと云ふ表情を幾度か相手に示しながら、

「實は奥様、突然見識らぬ私がお呼び留め申して何んとも申上げ様も御座いませんですが」と云ひながら氣極り悪さに手に持つてゐた帽子をいぢ／＼つて、

「私の弟、昨年大學に在學中の者で御座いますが、目下相當な配偶者を求めてゐるんですが」

「ハア」と奥様の最切のキツとした何者ぞツと云ふ顔付は此の時やつと讀めたと云ふ風に柔らいだ。

「最前お見受け申しましたお連れのお嬢様は奥様のお娘様で御座いますか」

「ハア」

「最早御縁組の所でもお定りになつて被居るんでせうか」

「いゝえ、まだ、まだ學校中なものですから。」

すると草田君の顔は急に希望に輝いて、

「若しお差支へなかつたら一つ御相談申上げに參上致したいと思ひますが、如何でせうか突然此處所で此處話を出すのは實になんとも」と草田君頭へ手を上げて恐縮しながら、相手の顔色を讀んだ。

「ハア何も御縁ものですから」

「では」と草田君勇み込んで、ポケットを探りながら名刺を掴み出し、その裡の皺の寄らない一枚を恭しく差出しながら、

「私は斯う云ふ者ですが、お差支へなかつたらお住所をお聴かせ頂けば」と天

晴れ工學士草田春光すつかり叩頭万遍だ。

「ハア、住所は牛込區矢來町●●番地。吉岡と申します」

と、奥様の方も相手が立派な紳士であるのを見その風體で知つて、何んの躊躇もなく答へた。草田君は天にも昇る心地して、

「それでは二三日の裡に御主人にお目に……」

「良人は只今相憎避暑に行つてるので」

草田君、この返事には少からずオヤ／＼の體であつたらしい、何故ならば此の物價の高い昨今餘裕綽々として避暑に行く様な身分なら、大分僕等と違つて身分が上等らしい、それぢや逆も話にならないと云ふ失望の色が微かに眉宇の間を掠めたが、直ぐ又「なアに其處が何も縁だ」と一縷の望みを抱いて、

「左様で御座いますか、ぢや何れ改めて悠つくり他人を介してお話に上りしますから、どうぞ其の切は」

すると奥様はにこやかに笑んで、

「何も御縁ですから」

「然し如何でせう、大體の方針、云はゞ遣つてもいゝと云ふ様なお返事を只今お伺ひ出来ませんでせうか」

と、思ひ切り大分肉薄した。それには奥様も、

「まアなんて氣の早い人だらう」と少からず呆氣に取られたらしかつたが、然し其態度は噁にも見せず、

「只今申上げた通り、私一人の意見では。兎に角良人ともよく相談致しまして」そりや尤もの云ひ分だ。草田め嬉し紛れに少し逆上てるナ、考へて見ろ誰れが途中で見ず知らずの人にピタリと逢つた、娘を見た、欲しいナと思ふたから呉れるか何うかも無いもんだ。己れは後に其れを聴いてゐて思はずブスリと噴き出した。草田君は其の笑ひ聲に驚いて振返つた、すると其處に己れと云ふ大

の男が何時の間にか控へてゐたものだから、妙にテレテ、
「ぢや何れ近々」と云つて、今度は急にグイと首を深く垂れて深厚なる敬禮の
下に、

「洵に突然此座話を申上げて申譯も御座いませんでした、幾重にもお詫び申し
ます」と、神妙な口を利いた。

「いええ、どう致しまして」と先方も亦叮重な挨拶の下に之に報ひた。二人は
右と左に別れた。

すると何時の間に来てゐたのかホンの近くに其の問題の令嬢がヂツと最前から
の二人の會話に耳を傾けてゐたらしかつたのが眼に付いた。草田はそれを見て
ハツとしたらしい。己れもヤツと始めて氣が付いた、己れは先刻から二人の顔
を見較べては夢中になつて其の話を聞き洩らすまいと許り心掛けてゐたものだ
から、小つとも何時の間に其處へ來たのか氣が付かなかつた。察するに屹度あ

まり母の戻りが遅いので氣が氣でなく休憩室から飛び出て探しに來たらしい。
すると思ひきや其處に母が若い紳士と話込んでゐたので、何事だらうと其れと
なく近くに佇んでゐたらしい。然もその話が自分に關することだつたから妙か
らず面喰つたことだらうと思はれる。草田君も眞赤になつた、令嬢も眞赤にな
つた、獨り我れ關せずと最切から終りまでニヤ／＼面白相にしてゐたのは己れ
許りだ。

⊠愈々直接談判

別れて了ふと同時に急に昂奮を覺えたのか草田君は僕に碌々物も云はずに休憩
室へ戻つて來て、何故か息をセイ／＼云はしてゐる。

「貴方店頭仰言つたの？」

「ウム、云つた、店頭云つた!!」と高らかにスバリとした調子で昂然として答

へた其處へ己れが坐つた。

「やア云ふたナ」

「あ」と、元氣が馬鹿にいゝ、それは云はむと欲して幾度か躊躇してゐたものを一遍に吐き出した昂奮より外はなかつた。

彼はグイと其處にあつた冷めたい飲みさしの茶を飲み乾して、

「到頭云つた!! 到頭云つた」と、再三繰り返した後で、

「旨く行くか、それとも駄目に終るか、ハツハ……」と肝高く笑つて、

「さア歸らう、遅くなつた」と、急に妻を唆かして立上がった。

「己れは失敬する、電車が違ふから。」

「そうか、ぢや失敬」

「奥様、左様なら」

「オヤさう、ぢや又、左様なら」

斯くして彼等と別れた己れは再び先刻買はふと思ふて買ひ得なかつた洋品部へ立ち戻つた、そして纏て自家へ歸つた。

翌日であつた、草田君は夕刻フイと己れを訪ねて來た。

「時に君に少し願ひ度いことがあるんだが」と云ふ。

「何を？」と首を上げると、

「外でも無いが、昨日の彼の件に就いて是非君が媒約に立つて欲しいんだ」と意外な云分だ。

「己れが媒約人？」と思はず失笑して、

「困るなア」と頭搔くと、

「いや此の際君をおいて他にない、君は今般の事情を一番明白に知つてるから」と云ふ。そして、

「考へて見たまへ、誰れが僕が斯うくした具合でお母アさんに逢つて、斯う

く云つて話をしたんだからと云つて、媒約人になるを承知して呉れるものがあるもんか、屹度ウヘー君は思ひ切つた事をやる男だなアーと大低の奴は仰天して了ふ。それよりか僕として他の者に實は斯うくの譯でと云ひ出せるものか、聊か己れの估券に關する譯だ。で色々己れも其の人選に惱んだが、こりや一番君を立たせるに如くは無いと思ひ込んで今日は遣つて來たんだ、是非共承知して貰はなくちや」と退引ならぬ頼みだ。

「君はそれに媒約役に就いては充分の經驗を持つてゐるんぢやないか、オイ頼んだぞ」

と、前へも後へも退かさな。己れは暫しが程はウーンく唸つた。

「そんなに唸らなくてもいゝ、返事してくれ。」もう破れ被れた。

「よし、談判して遣らう」

草田は思はず額を叩いて、

「チエツ有難い。ところで何日行つて呉れる？」
と、短兵急も急、突撃の状態だ。

「さア此處二三日は非常に忙しいから、其の裡屹度行く」

「屹度か、呉れくも頼んだぞ」

斯う云つて喜んで草田は歸つて行つた。それから早くも二三日経過した。多忙も過ぎた。一體己れと云ふ男は何かで書いた筈だが、非常に精神が興奮した曉には驚く可き許り流暢な辯が出る、反對に少し閉さいだが最後その一言一句の重いつたらない、吃々として我れながら愛憎が盡きて憎らしくなる。それで何時興奮が突破し、何時又沈鬱になるかそれが自分ながら分らない、實に微妙な心理作用は兎ても其の瞬間でなくちや發見出來ないのだ。

そこで今己れが草田君の乞ひを納れて先方へ行つたとする、不幸にして折悪しく沈鬱の場合であつたら、十云ふ可きことが二つ位しか云へぬことになる。一

體「こんな縁談のことは滔々懸河の辯を振はなくちや初對面の相手を感じさせることの出来難いものだ。」

己れはチーツと何かの興奮状態を待ち構へてゐた。興奮したが最後そらツと一目散に飛び出さうと思ふてゐるんだ。

所が偶然、弟が僕の妹の良人たる和氣君を連れて來た。ビールを一本二本傾けてゐる裡にツイ此の話が出た。何故又この話が出たかと云ふと、和氣と云ふ人は非常に理路整然たる話をする、それに如何にも雄辯で、云ふことが又一人一人に至誠から出るから、聽いてゐるものは感動せずにはおられないんだ。現に隣の鈴木君もツクツク感心して「世の中に此度痛快な話の旨い面白い人はゐない」と激賞してゐる位だから誰れの眼から見ても同じだ、それは又一面如何に頭腦が良いかと云ふことを裏書してゐる。

で僕は何日までも斯うチーツとして精神の興奮を待つてゐて、草田君の約に反

するよりも寧ろ一切を和氣君に打ち明けて、和氣君に行つて貰つた方が、生じつか己れの啗辯で頼み込むよりも孰麼に有利かも知れぬと思ふたので、一切を披歴した後で、

「どうです、和氣さん貴方が此の話を引受けて下さいませんか」と頼んで見た。チーツと話の経過に耳を傾けてゐた和氣君は此の時顔を上げて、

「面白いですなア、寧ろ痛快ですなア、宜しい行きませう」と、一二もなく引受けて呉れたので、己れはホツと重荷を下ろした。

恰度其の時己れの弟は座敷にゴロリとしてゐるのが堪えられなくなつたと見えて、僕の友人の子息義人君（中學一年生）が矢つ張り傍にゴロリとなつてゐたのを願みて、

「オイどこかへ散歩に行かうか」と催ふて見た。

「散歩？」と義人君は勇み立つて、

「賛成！ 僕大好きだ、行きませう」と早や立上がった。
 「どこへ行かう、戸山ヶ原へ行こか」

「どこでもいい」と話合つてゐるのをフと耳にした僕は、
 「オイ、オイ」と二人を呼んで、

「どうせ散歩に出る位だつたら、何處へ行つたつて差支へないだらう、それぢや二人で今話してゐる話の本尊草田君の頼んだ其の娘さんの家をどの邊か見て来て呉れないか、豫め家の見當を附けて置かないと、和氣さんが行く時に迷つたら困るから」

「どこだい？」

「牛込矢來町だ」

「牛込？ それぢや近いなア」と弟は返事しながら、義人君を顧みて、
 「君行かうか」

「僕は何うでもいい、行きませうか」

「ぢや行かう、草田君は何處家の娘に見當を附けたのか、大に興味津々だ」と
 ニンがりして立上がった。附記するが草田工學士が弟の爲めにと云つた其の
 弟と僕の弟とは大學の同窓で而かも同郷で、猶ほ又中學時代からの仲い
 友達ときてゐるんだから、己れの弟は全て我が事の様子に好奇心を持った、二
 人は田舎者が軍艦でも見物に行く様な一種の物珍らしさで出て行つた。
 略二時間程して二人は歸つて來た。

「見て來たぞ」と額に汗をにぢませてゐる。

「直ぐ分つたかい」と己れはニコ／＼尋ねた。

「ウン直ぐ分つた」と云ひつゝ、

「割合に大きな家だつた、ねえ義人君」

「ウン大きいよ、直ぐ分つたねえ」と義人君は合槌を打つた。

「電車は？」

「柳町で下りた」

「ホウ柳町？ 近いなア。それぢア後で地圖を書いておいてくれ」と云ひつゝ、
「誰れか出てゐたかい？」

「誰れも」

「吉岡なんと云ふ家だつた？」

「さア何んと云つたか、それまで注意しなかつたが。義人君、君見たかい？」

「僕見たよ」

「僕もチラと読んで見たが、我が事の様少し氣極りが悪かつたが、確かエー
と」

「あの字はエー」と義人君も小首傾けたが、遂に二人とも孰方も思ひ出せな
かつたらしい、何時しかあゝ疲れたく〜と云ひながら二人は羊羹をムシヤム

シヤ喰べた。話は其の儘になつた、和氣君はそれぢや此座話は眞晝中に行く
よりも夕刻尋ねて行つた方が一番話に落着があつていゝから、それぢや明日四
時頃私は改めて此の家へ来て、それから改めて先方へ参ることにしませうと定
めて、其の話はそれ丈けにして、直ぐ一同は和氣君歓迎の爲めに「すゞめ」へ
出掛けた。

翌日己れは退引ならぬ所用の爲めに出かけて行き、歸つて來ると、和氣君は既
にチャンと遣つて來て、座敷で妻と話込んでゐた。

「失敬しました、失敬しました、ツイ遅くなつて」と己れは濟まなかつたと詫
びを云ひながら、座敷へ上がった。

「いゝや、もツイ先きに來た許り」と和氣君は敢て氣に留めてゐない。林檎の
皮をむきながら、暫らく浮世話をした後で和氣君は、

「ぢや行つて來ます、番地が分つてますか」

「あッ、その住所は。困つた實は弟に詳しく聞く筈になつてゐた所が、ツイ弟が地圖を書いて行くことを忘れたらしい。然し義人君は覚えてゐるだらうオーイ義人君」

「オーツ」と書齋で本を讀んでゐた義人君は出て來た。

「君知つてるかい、昨日行つた道順を」

「さア」と考へ込む様子をして、

「確つかり覚えなないけど大體」と云ひながら、又書齋へ駈けて行つて、鋭筆と紙とを持つて來て、それを己れの前で擴げながら、

「東京の地圖は確つかり分りませんが」と云ひつゝ、此處で電車を下りて、斯う行つて、斯う曲がつて、左に折れて、エーと此の邊です、此處に交番がありました、此の交番で聴きましたと割合に詳しいが、「これはアヤフヤですよ」と云はれて聊かがツかり。

「僕に覚えて來いと云ふんでしたら詳しく覚えて來る筈でしたけど、弟さんさへ知つてゐりやいゝんだと、僕平氣でしたよ」と、嘯きながら「然し確かに斯うでした」と云ふ。頭腦のいゝ子の云ふことだから、それぢや大した間違ひもあるまいと略見當を附けたが、考へて見れば己れが行く可き筈の所だ、それを和氣君に行つて貰ふんだから、その和氣君にアヤフヤな道順を教へては洵に相濟まぬ話だと思ふたので、それぢや一層その宅の前まで己れも幾分の責任があるんだから、和氣君のみを煩はすことなしに、おれも共々に其の家を探し、見附かつた上で自分のみが歸つて了はふと思ふた。でなくちや遙々折角遠い所から東京へ久し振りで來ながら、此座談を頼まれたがいゝが、その爲め家が見附からぬ爲め途方に暮れるのも、己れとしては餘りの厚顔で申譯のないことだと思ふたからだ。

「僕も門の前まで一緒に参りませう、道々章田君の家庭のことも詳しくお話し

申上げたいたすから」

「そうですか、それぢや僕も大變助かりました」

「貴方、御飯の用意が出来ました」と其の時妻が注進に来る。

「それぢや」と二人は立上がつた、旨い肉がたぎつてゐた。

☒ハツと答へて出た主こそは

食事が済んで、

「さア出かけませうか」

「え、出かけませう」と互に洋服を着込んでゐると、妻は横合から、

「好奇揃ひですわねえ」と子供を抱いて笑つてゐる。

「和氣さん確つかり遣んなさいよ」

「確つかりて、全で木によりて魚を求め様な話で、ハツハ……」と答へて和

氣さんは先きに出た己れを追ふた。

途中、己れは「つまり草田君の弟と云ふのは」と大に説明の勢を執つた。和氣君は一々頭腦の中に其れを刻み込んで行つた。

「一體先方の名前は何んと云ふんです？」

「吉岡と云ふんです」

「吉崎何んと云ふんです？」

「さア其れを昨日見に行つた弟にも聞いたんですが、確つかり覚えてゐない相でした、草田君にも單に吉岡とのみ名乗つた筈ですから」

「住所は？」

「その牛込矢來町なんです」

「牛込矢來町!!」

と、小首を傾けて、

「牛込矢來町の吉岡と云んですね」

「ええ」

「こうつと何んだか聞いたことがありますよ、エーと」
暫し幾度か記憶を呼び出しかけて、

「さう、さう」と獨りで頷つきながら、

「定春と云ふんぢやないでせうか」

「さア」

「定春と云ふ方でしたら僕知つてますよ、知つてる所ぢやない僕の血縁ですよ」

「へえー」

「若しや定春と云ふ人だつたら。奇遇ですなア、實に奇遇ですなア。その定春と云ふ人の弟さん今京都府にゐるA君と僕とは無二の親友なんです」

「ホー」

「定春と云ふ人は確か陸軍少將ですよ、そして其の奥様の兄さんと云ふのが今の▲▲縣知事ですよ」

「ホー」

「僕は五六年前に一度偶然その兄さんや奥様に須田町で逢つたんですよ、その時お住所は何處ですかとお尋ねしたら、確か確か矢來町と聞いてました。」

「へーえ」

「僕のまだ高等學校時代によく遊びに行つたもんですよ、だからよく知り合つてゐるんです」

「フーム」

「じょうも僕は何んだか其の吉岡と云ふ人が定春さんの様に思はれて仕方がない」
「ぢや今十七八の娘さんが其の時代にゐましたか」

「其の頃まだ小さかつたでせうが、確かるた様に覚えてますよ、イヤ確かに
ました！」

「それぢやヒヨツとすると其の人かも知れませんかア」

「さうかも知れませんが、若しさうだつたら。實に世の中は廣くて狭いと云ふ
ことを痛切に感じますなア」

「全くですねえ」と調子を合はすと、

「何んだか其の様に思はれて仕方がない、胸がドキャンとして來ました」

「でも。人違ひでせう？」

「さアそれが若し」

などゝ話合つてる裡に電車道へ來た、二人は乗つた。

電車から下りて義人君に教へられた通り眞直にだんだら坂を登り詰ると、成
程交番があつた。此の交番の横を左に折れるんだと聽いてはるたが、若しや違

つてゐたらと念の爲めにと再び訊いて見る、矢つ張り義人君の言葉に過ちなく
左に折れて八百屋の横町を曲がつて一番目の小路を曲つて二軒目が其の番地だ
と云ふことが分つた。

教へられた通りを行く。

「この邊でせうか」

「そうでせう」

「貴方、マッチ持ってますか」

己れはポケットを探つた。

「ありません！」

「さう？」と云ひながら和氣君は一生懸命あちこちのポケットを探つてゐたが
其の裡

「あつた！ あつた！」と云ひながら、マッチを取り出して試みに一軒の家の

表札近くすり寄つてマッチを擦つて見る。姓が違つてゐる。

「此家ぢやない」と云ひつゝ又歩いた。

「この家かも知れない」

「さア」とマッチを出す。一方を照して見ると町名と番地ばかりだ。姓はこつちの方だナと右の方へ足引きすりながら、マッチを擦る、ふうと消える、又擦る、又消える、斯くすること二三度何うしても點かない。

「どうも此家らしい」と和氣君は異様の顔付しながら、箱からマッチの棒を取り出した。

「今度はゆつくり落着いて消さない様に」

「ム、ム」と頷いて念入りに點したが、今しそれを上に翳さうとする時、ふうと又々消えた。

「此の棒は變だ」

「どれ私に貸して見せなさい」と云つて己れは手を出す。

「待つて下さい、モ一遍やつて見ますから」と云ひつゝ和氣君は今度こそはと念には念を入れて擦り、片手で風を蔽ひながら、チーツと模様を見詰めてゐたが、もう大丈夫と確信がついたか、

「これなら」と云ひながら、大事相にして上に翳した。二人の眼は大きく開かれた。

見ると古びた表札は正しく吉岡と讀められた、オツ此家だと思ふ間もあらせず和氣君は既に其の名をも讀んだものと見えて、

「やツ」と小聲ながらも頓狂な叫びを上げて、

「定春だツ、そらツ」

見ると成程定春だ。マッチは同時にふツと消えた。

「あツ矢つ張り定春だつた！」と和氣君は太息するかの様な呼吸をして、

「何んだか己れは胸騒ぎすると思ふてゐた」と感に堪えぬ面付して、
 「あゝ實に、實に不可思議だ、奇遇も奇遇、凡そ斯うも不思議なことがあるも
 のか知ら」と寧ろ呆氣に取られて暫らく呆然とする。

「どうです入る勇氣がありますか」

「勇氣どころぢやありません、大に懐舊の情に堪えませんが、こりや實に面白い」

「ぢや僕は之で用が無いんですから歸ります、途中草田君の家が近くですから
 一寸立寄つて此の話をして行きますから。」

「さうですか、では入つて行きますよ」と和氣君は思ひ切つてキツと門をあけ
 てツカ／＼と奥へ入つて行つた。己れは好奇心に唆られてヂツと息を凝らして
 門前で形勢を觀望してゐた。

「御免なさい」と闇をついて和氣君の聲は大きい。

「ハイ」と、さわやかな年若い女の聲がしたかと思ふと、

「私はお國で御懇意にしてゐました和氣で御座います、御主人は被居います
 か」

「主人は少し遠方へ參つてますものですから」とハツキリした返事が聞える。

「それぢや奥様は？」

「ハイ、ゐますで御座います」

暫く森とする。

「さア何卒お入り下さい」

「それぢや一寸御邪魔さして頂きます」と云つて靴を脱いで奥へ案内された様
 な氣配がする。

「よくこそ被居いました」と、どうもあの娘らしい聲がする。「私は和氣と云ふ
 ものですが」と和氣君も改めて挨拶してゐるらしい、四邊が針の音でも聞える
 位の静けさだから明白に聞えて来る。して見ると先刻の玄關へ出た女の聲と同

様だから玄關へ出たのは矢つ張り娘さんだつたのかな。

「之は之はまアお珍らしい」と今度は奥様の聲がする。

「和氣で御座います、永々御無沙汰いたしました」と和氣君は叮嚀を極めてる。

「まア悉皆御立派にお成り遊ばして、見違へる様で御座います」

「やア」と和氣君は云つてゐる、外から見えないけど屹度頭を搔いて恐縮の體だらうと察せられる。

奇縁！ 奇遇！！

此の様子ぢや色々懐舊の話も湧いて随分長びくだらうと思つたし、時々一人二人通りすぎる連中が軒下に突つばつてゐる此の己れを不思議相に見詰めたりするので、何んだか薄氣味が悪くなつたりしたので、己れは踏惶として踵を廻ら

した。そして草田君の宅を訪ねた。

草田君はツイ先達まで本郷に住んでゐた、本郷にゐた頃はよく己れは訪ねて行つたが、牛込へ移轉してからは一度も訪れなかつたんだから、家を探すに相應の勞れを催した、でも直ぐ分つた。

あゝ驚く可きの進化ぢやないか、草田君は實に宏壯な邸宅を構へてゐる、全で本郷の時と較べると雲泥の差である。家を隣家よりも一間餘り土臺を高くして兩手で抱え切れぬ様な石の門だ、然かも押しで見ると、戸は重々しくもギイと云ふ、人間ギイと云ふ音の發する門の家に住まなくちや駄目だ、草田君近頃何かいゝことがあつたと見えるぞ。

がらりと開けて、

「オイ草田君、居るか。やアゐる、ゐる、奥様失敬」

二人は折柄茶の間に睦まじく語合つてゐた。

「やア西川君か、この間から君を待つてゐたぞ、今日も来るか明日も来るかと今も噂してゐた所だ」

「そうかい」と云ひつゝ靴を脱ぎ、脱ぎ、

「君や立派な家に住んでゐるなア、近頃出世でもしたか」

「やア、早々冷評か」と來たナ、どうして〜」

「でも石の門ぢやないか」と云ひつゝ入つて行き、

「やア奥様失敬、いつ見ても綺麗だなア、日向きむ子も足の下だ」

「いやよ西川さんは何時も冷評かすんですもの」

「冷評かすんぢやない、あゝ家は宏壯天を注し女房はその美天下を風靡し、斯くて草田君萬歳か」

「オイ、オイ」とそれでも草田君悪い氣はせぬと見えて嬉し相にニコ〜しな

がら、

「二階へ上がれ」と云ひつゝ先きに立つ。

「暗いなア」

「今寢ようと思ふてゐた所だ、今電燈をつける、オツと注意して上がらんと危ないぞ」と、云ひつゝ駆け上がつて行つたかと思ふとバチン、急に煌々とあかるくなつた。

「此處が書齋か」

「ウン」

「己れの書齋よりか立派だ、生意氣だぞ。此處が座敷か」

「ウン」

「フーム」と見廻しながら、

「その疊のへりはお寺の疊みたいだ、氣に喰はんど、君は何時でも此の部屋へ入ると今でも息を引取る様な氣がせぬかい？」

「ひどいことを云ふねえー」と一寸顔を擧めて、

「己れも此の疊は氣に入らないんだ、もう云ふて呉れるな。君のは真正面からピシ／＼やつ付けるんだから堪まつたものぢやない、その代りどうだ景色はいゝだらう」と窓を開いて見せる。

「ウンこりや素敵だ、一望東京が見える見えるお江戸が見える、やア品川が見える横濱が見える」

「其處に見えやしない」

「これは形容詞だ、形容詞と云ふものは必要なものだぞ、オイ咽喉が乾いた、お茶が飲みたい、女房を呼んでくれ」

「オーイ女房ツ」と草田君は聲を張上げた。

「ハイ只今」と云ひつゝ妻君は茶を運んで来て、「女房だなんて随分よ」と態と白い眼をして見せる。

「奥方様、怒つたね」

「いやよ奥方様だなんて」と今度は艶然。言葉一つで草田工學士夫人淑子の君は喜怒哀樂の變化が凄まじく早い。

全く草田君の妻君は音に聞えた美人で、道を歩けば人々アレヨ／＼と立止まる要素を備へてゐる位だ、況んや輝く電燈の下に其の艶麗さてない。

「オイ草田君」

「ウ？」

「君の妻君程美しい女は無いぞ、あの髪、あの顔、あの鼻、脊、身體、足、手綺麗なものだ」

「もう西川さん許して頂戴、もう協はないわ、お菓子をどつさり持つて來ますから何も云はずに置いて頂戴」と云へど流石に會心の微笑は見逃がさじ。

「己れの妻は云つてゐた、私の家へ今まで遊びに來た人の中で草田さんの奥様

は全で繪から抜け出した様な美人だて」

「オイ西川君、良人の前で餘り賞めて呉れるな、偶には己れも賞めてくれ」

「君もいゝ、品行はよし氣立は優しいし、石の門はあり」

「オーイ勘忍してくれ!!」

二人は座敷の机を圍んで向ひ合つた。

「扱て草田君實は」と己れの行かなかつた理由、及び和氣君が最も適任である

こと、その和氣君と偶然血縁關係のあつたこと、及び和氣君が目下只今話の

最中、己れはそれを見送つた其の歸りであること一切を物語つた、すると、

「へーえ、實に世の中は廣くて狭いねえ」と、草田君は廣くて狭い額を叩い

て云つた。

「だから此の交渉如何の返事は二三日の裡に齎すことにする」等述べて、あと

は暫らく妻君と三人で浮世話。何日か淑女畫報で知つたんだが、妻君は目下上

流婦人として心得置くものゝ一つと覺えてか栗原玉葉門人一同と寫眞を寫して載せてゐたことから、その寫眞は此處の奥様がお汁粉を喰べかけてゐたことまでさらけ出したので妻君悉皆ベソを掻いて「愈々以つて西川さんには協はない！」と冠を脱ぐ。

暇を告げて自宅へ戻る、がらりと開けて入つて行くや否や、妻が飛んで出て

「貴君遅いぢやありませんか、和氣さんが先刻からお待ちですよ」と云ふ。

「オーツもう歸つて來てゐるのか」と云ひつゝ靴を投げ出すと、

「遅かつたですねえ」と和氣君の聲がする。

「やア濟みません、實は草田君の所でツイ〜話が延びたものですから」と云

ひつゝ座敷へ通つて、

「どうでした？」

「意外でしたなア」と先刻の記憶を呼び起しながら、

「あれからズツと話込んでるたんですよ」

「何うでした結果は？」

和氣君は天機は仲々洩らさじと許り悠然と構へて、

「先づ私の家と吉岡さんとは斯う云ふ関係があるんです、今も奥様に説明してゐた最中なんですが」と云ひつゝ、其處に書き認めてあつた原稿用紙を引き寄せながら、

「私の祖父から出て斯う云ふ具合に」と一々説明しながら、「此家から斯うして斯うなつたのが吉岡家です、だから此の線で御覽下さい、私と斯う云ふ関係になるんです、複雑ですが云はゞ遠い〜親類関係を生ずる譯ですな」

「ウム、ウム」と、己れは明細に至らざるなき其の説明に一々首肯した後、

「何うでした？」と又訊いた。和氣君は愈々玉手箱を開いた。

「先方では草田君のことを世の中には彼麼快活な方があるものでせうか、軍人

以上だと驚いてました。そこで私は平生の草田君を貴方に聞いた通り話しました處、成る程其麼面白にお方なんですかとニコ〜聞いてましたよ。

さて兄弟のことから悉皆話した後で、

「要するに結婚と云ふものは機会です、男の方はまだ大學にゐる學生ですけど學生中でも機会さへ宜かつたらと思ひ、話丈け定めて置いて卒業した曉改めて添はすことにしたい方針であります」と述べ、私は之は聞いたんですが前置して其の學生の純なこと、模範的人物なこと、磊落この上なきことと等を率直に並べた。すると奥様は傾聴久うした後で、

「大變結構なお話です、實は先達も或るいゝ所から申込みもあつたんですが、私の教育方針と致しまして、娘は學校にゐる間だけは何も知らぬ飽く迄も無邪氣な所謂眞の娘として育て、見たいと思ひます、それ故結婚の話などと云ふ其麼世間に近づいた話は愛にも聞かせたく無いと思ひまして實はお断はり申上げ

た様な次第で御座います。で只今のお話も至極賛成で御座いますが、どうか娘の卒業するまで此の話は中絶して戴きたう御座います、卒業しましたならもう其れからが一人前の女性としての教育もありますから、其の際にして頂きたいのです、今は何も聴かせ度くない希望で御座います、それこそ純に育てたいのです、私の結婚した時はあまり年若く何も知らずに嫁ぎましたので世の中と云ふものは娘時代に少つとも存じませんでした、それは不幸だと思ひましたそこでせめて娘もつた時には娘だけは相當の年配にしてから嫁入りさせたいと心掛けておりました。決してお断りは申上げる爲めに此慶事申すのではありません、眞實で斯う申すんで御座いますから、どうか此の上は卒業まで此の話は待つて戴きたう御座います、何も御縁のものですから。斯う云ふ先方の返事でした。」

己れはチーツと一句も遁がすまいと耳を立てゝゐた。

「成程確つかりした云ひ分ですな」

「そりやお母アさんと云ふ人は確つかりした方ですな」

「左様でせう、その云分は仲々凡人の云へないことです。……ちや結局がそれですな」

「ま、左様です」

「娘を見ましたか」

「どうも最初出て来たのは目的の其の娘で無いらしかつたですよ、私は奥様の兄さんの令嬢ぢやないかと思ふんですが」

「知事のですか」

「左様です」

「ちや遊びに来てゐるんでせうか、それとも東京で教育する爲めに預かつてゐるんでせうか」

「さア」

「貴方は小さい時の娘さんの顔を覚えてるませんか」

「のまんねえ」

「出て来たのは誰れでせう、美人でしたか」

「ゾツとする程の美人ぢやなかつたですけど、群を抜いてみましたよ」

「それでせう」

「でも奥様の言葉使いが違つてゐたらしかつたですよ」

「左様でしたか。」

「斯うなりますと世間の方は皆な知合の様な気がしますねえと先方も驚いてましたよ」と山崎君は云つてから、言葉を改めて、

「僕には斯う云ふ離る可からざる關係の家が東京に三軒あるんです。第一は此の西川家、第二は九段、それに此の吉岡さんです。その吉岡さんと偶然とは云へ斯座話で測らずも住所を明らかに知つたとは全く意外でしたよ」

と幾重にも驚いてゐる。

「何うしませう、此の話はそれぢや」

「斯う云つてました、娘が卒業した時には何れ貴方つまり僕ですな、僕の方へ葉書を差上げますから、御縁があつたら宜しくとのことでした」

「ぢや保留ですな」

「ま其座形ですな」

「兎に角事の結果の如何に關せず面白かつたぢやないですか」

「愉快でしたな。」

斯くして此の話は先づは一段落を告げた、此後どう發展するか其れは飽く迄も疑問である。さりながら事の成否は兎もあれ突飛に出て、突飛に進んだのは如何にも面白い。

翌朝、草田君の方から遣つて来た、一切の顛末を物語つて聴かせ、改めて和氣

君に紹介すると、二人は忽ち一見舊知の如くなつて、
 「何分宜しく。至つきり先方を知らぬ西川君に行つて貰ふより貴君の方が敦厚
 に先方を緩和し、有功であつたかも知れませんでした」と云ひながら草田君は
 堅く和氣君の手を握つて感謝の意を表して歸つた。

◇申譯ありません

以上の話を眞木さんの家族一同は面白相に聽いてゐるが、話が終ると、スーッと
 と奥様が一膝乗り出して、「まアよく似た話がありますねえ」と云つて次の様な
 話をした。

眞木さんの奥様は先日娘の花子さんを連れて松坂屋へ行つた。そして「半襟の
 部」にゐて、あれにしようか、之れにしようかと一枚一枚念入りに物色してゐ
 た。すると其の様子をヂッと一方にあつて眼動きもさせずに見入つてゐる二人

の貴婦人連れがあつた。奥様は早くもそれに氣が付いて「おかしい、どうして
 私等許りを彼座に熱心に見て被居るんでせう」と思ひながらも氣にも留めず
 るると、聽て幾度か逡巡の後、遂に意を決した様子をして其の二人が近付いて
 来て、

「奥様、何んとも申上げ様もない失禮なことを承はりますが、此方のお嬢さ
 まは未だ」

と、もじくしながら其の裡の年かきな婦人が口を切つた。奥様は早くも「ハ
 、アン、縁談だナ」と思つたので、懇ろに挨拶を交換しながら、

「ハア、之はもう天にも地にも私共一人しかない娘で、これつ切りで御座い
 ます」

花子さんは養子娘である。

「まア、左様で御座いますか、まア」と、さも堪えやらぬ惜しい面付して暫

しが程は花子さんに見惚れ、

「實は親類に是非美しいお嫁さんが欲しいと探しあぐんでゐるものですから。ツイ〜失禮を申上げて」と二人は聊か赤らんで、幾重にもお詫びしながら去つて了つた。

「時々此の娘を見て左様仰しやる方があるんですよ」と奥様は我が子ながら全く綺麗だと見惚れる様に花子さんの顔を覗いて云つた。

「して見ると時世が最近非常に進歩して來ましたね。」

「簡單でいゝかも知れませんか。」

「以前は之と目指した候補者の家まで随つて行つてその家を究め、其れから申込んで行つたものですが、變れば變る世の中ですねえ」

「さうした方が随つて行く電車賃丈け助かりますね、何でも今は物價騰貴の際ですからねえ。」

一座は均しく頬を崩した。

最前から僕の語る話も、又奥様の語る話にも黙念として耳を傾けてゐた此の家の主人は此の時始めて口を利いて、

「娘も左様云ふ具合に見立られる縹緞だと思ふと親として悪い氣もしないが、然し飛んでもないこともありますよ」

と、前振れして語り出した話は斯うだ。

去年の五月、眞木さんは娘の花子さんを連れて、上野の森へ出かけて暫らく花散つた後に出た許りの柔かい青葉の木蔭にうつとり眼を閉ぶつてゐた。然し娘の花子さんは父の様に何時迄もヂツと坐つた儘になつてゐるのが淋しくて仕方になかつたので、「ねえ父さん、下りませうよ、下りませうよ」と強請むだ。それぢやと漸く立上つて漸次公園を下つて廣小路まで來た。

「父さん活動を見ませうか」

眞木さんは未だ嘗て娘を一人ほつちで外へ出したことが無いので折角の望みを断はるのも氣の毒だと思ふた。そして少し戻つた公園下の活動館へ足を入れた。聴て其處を出たのは西の空の赤い頃で、暮色は既に上野の森に迫つてゐた。「何か喰べたい」と無邪氣な花子さんは父をツ、いて見た。父も空腹だつたので、「それぢや」と云つて足の向くに任せツイ近くの「米久」牛肉店へ入つた、そして二階の一隅に控つかと腰を下ろして思はず「あゝ疲れた」と吐息した。そこへ又新たな客が上つて來た、見ると若い大學生であつた。彼等はツイ隣の机に陣取つた。

食事を済ませた父娘はそれから直ぐ家へ歸つた。

其の翌晩である、眞木さんは意外な手紙を受取つた、それには「私は昨日上野の森でも貴方々に逢つた、活動でも逢つた、それに最後に又米久でもお目にかゝつた。外でもないが私の連れの男が是非貴方の娘さんを欲しいと云つてゐる

貴方は呉れてもいゝと思ふ」と云つた様な非常に傲慢な書きつ振りであつた、そして法科の學生であると住所から本名まで明記してあつた。

其の時恰も眞木さんの兄さんで當時當地の控訴院部長をしてゐる人が偶然にも其の手紙が着いて間もなくのこと突然遣つて來た。で「どうしやうか」と眞木さんは早速相談を持ちかけた。すると猶豫を云はさず其の手紙は警察へ届け出したら宜からうと云ふので、眞木さんは直ぐ様それを持參して「何分宜しく」と署長に頼んで歸つた。

翌日署長から呼出が來た、早速行つて見ると本人を呼んで特と訓戒を與へて置いたから御安心なすつて下さい。大學生と云ふのが虚言だと思ふて取調べたら矢つ張り眞實大學生であつたと云つて、

「貴方々に食事を御馳走された様に申してましたが」と附け加へた。

「私が食事を」と眞木さんは吃驚して「いゝえ決して其塵事はありません」と

極力否認した。すると署長はチョツと舌打ちして、

「仕方のない奴だなア」と眉をしがめたが、直ぐ笑顔に變つて、

「まア其塵譯で。もう決して心配は要りませんから」と、充分に保證して呉れたので、眞木さんは厚く禮を述べて歸つた。途すがら「どうして私共と食事したなど、變な事を云つたんだらう」と幾度か小首を傾けて「アツそうか」と始めて頷いたのは米久の二階の隣へ坐り込んだ二人の大學生のことが其の時思ひ當つた。昨日の手紙の様子と云ひ、署長の前で旨く云ひ遁れた口調と云ひ、それをダシに使つたらしい。大學生にあるまじき以ての外の云分だと其の時ムツとした。そして苟くも最高學府の者でありながら上野から活動へ、活動から米久へ、米久から自宅まで知らずくの裡に後を随けるなど、學生にある間敷き行爲だと思ふた。然しもう之で危険が去つたと稍安堵の思ひで家へ歸つて來ると、

「貴方、又手紙が參つてますよ」と、妻君がオドオドしながら云つた。

「ウン？ 又手紙？」と流石に眞木さんは憤怒の高鳴りを禁ぜなかつた。そして妻君が差出す其れを取る手遅しと許り披いて讀んだ。

「なんだ訛狀か」と讀み終つた眞木さんは額の青筋を漸と收めて斯う云つた。

「まア、お詫びして來たのですか、私は先刻から胸がドキ／＼して碌に御飯も喰べられませんでした」と、漸つと恐怖から遁れた安堵の微笑を微かに双頬に浮べた。

所へ兄が歸つて來た、一切を眞木さんから聞いて、

「食事を御馳走になつたなど、以つての外の云分だ、よし己れが今から談判して來てやる」と怒髪天を突いて出て行つた。歸つたのは可成りに遅かつた。

「ゐましたか」と先刻から待つてゐた眞木さんは兄の顔を見るなり訊ねた。

「ウンゐた」と勝ち誇つた様に兄は答へた。

兄は何々控訴院部長法學士眞木△△の名刺を持つて面會を求めた。男は失神せむ許りの驚愕の下に彼を招じ上げた。

「君は苟くも將來有望な青年ではないか、然かも一度び校門を出づれば社會の崇敬を捲ち得る身でありながら、良家の婦女子に附け文すると云ふは何と云ふ量見だ。今の大學の先生達は娘に附け文しろと君等に教へてゐるか、僕等のゐた時代には其慶學問は無かつた筈だ」

と、判官一流の辛辣肉を刮ぐるが如き筆法でやり込めた。たゞさへ自分より先輩の法學士たるに辟易してゐる所へ、然かも控訴院部長と云ふ嚴めしい肩書を示した上、此の筆法で出たから男は眞蒼になつてブル／＼と思はず身を震はした。そして泣いて罪を謝した。兄さんは、

「善良なる法律を研究するものが、自ら法に觸れる様な研究するとは怪しからんぢやないか。」

「怪しからんであります」

「して見れば君は怪しからん男だね。」

「何んとも申譯けありません。」

「注意したまへよ」

「ハッ。」

斯くして揚々と引上げて來たんだ。

「もう何も心配することはない。まア酒でも飲まして呉れ」

斯う云つた兄の顔は晴れ／＼として一點の曇りがなかつた。一同は始めて魅つた様な氣持ちになつた。

眞木さんは語り終つて「世は様々ぢや、様々の人間が住んでゐる、ハッハ……」と高らかに笑つた。

◇奉願書

隣の家に黒犬がゐた、或日彼は何んの骨か知らぬが素敵に大きな骨を口に
して大喜びで歸つて来た、そして若しや他から此の好餌を奪ふ侵入者が不意
に現はれやしないだらうかと思つて憤りながら旨相に喰つてゐたところ肉の
中から一つの大骨がヒョックリ飛び出した。犬は此のおれが此の牙でこの骨を
ムキ出して屠り始めたが、グツと總口に力を單めたかと思ふと、何故かコク
ンと音がしたオヤと見るに急にグナリと流すばかりであつた。
山の御馳走を眺めた限り、涎をだら／＼と流すばかりであつた。

犬はあまり慾を逞ましふ仕過ぎて骨まで手を延したお蔭で、到頭頸をほづ
して了つたんだ。それから此の黒犬は何一つ喰ふことが出来なかつた、日々
悲しげに其の飢を訴ふる様は見ると堪えなかつた。斯うしてゐたら幾日か
の後、彼は死すべき運命を當然荷はればならなかつた。
其れを見るに見兼ねて隣の奥様は次の様な願書を交番へ差出した。

奉願書

私共家に共同生活罷在候ひし黒犬(一名クロ)儀今度頸外れ申候に就き、何
卒の御慈悲を以つて宜くお取計らひ被下度此の段奉願上候也

交番様

吉田擴同妻春子

藤田君の結婚

先日の晩、原尾君をフイと訪ねて見る氣になつたので「原尾君居ますか」と案内を乞ふた。すると下女は「誰方で御座いますか」と訊ねるから名前を云はうとすると、「ヤア西川君だらう、入りたまへ」奥の方から主人公自らが返事する。つか／＼と行くと、「君の聲は一ぺんで分るよ」と机に向つて何やら調べながら云ふ。

「どうだ學校の先生は？」と訊ねると「イヤもう原尾先生、原尾先生と大持てだ」とシテヤツタリ顔に云ふ。原尾君は都下で有名な某女學校の先生だ。大正二年出の文學士。

「ウム、君に是非聴かせたい話があるんだ。」

「ホー何？」と己れはグイと腰掛を引寄せて一歩進み寄つた。

「實に面白い最新式の結婚法なんだ」と云ひつゝシガーに火を點けながら語り出した話は斯うだ。

原尾君の友人に藤田君(假名)と云ふのがゐた、彼は高等師範を出て其れから更に何を思ふたか京都大學の法科に學び、聽て其れを専攻して〇船會社に務めた恰度その頃から縁談があらゆる方面から持ち出された。然し藤田君は「自分が一眼見て之れこそ眞に天下一品、日本一の美人であると自分で確信したもので無くちや斷じて貰はないのだ」と云つて片ツ端から刎ね退けた。最初の間は、「オイ之はどうだ」之は美人だ」之は屹度君の要求を満たすに足る淑女だ」と様々に寄せて來たが、藤田君は一眼見るか見ないで「なんだ此の位の」と許り一々ペン／＼刎ね付けて了つた。もう斯うなると誰れも親切の盡し甲斐のない男だと遂には誰れ一人妻君の妻の字も口出すものがなかつた。藤田君は却つて其れが幸ひだと云ふ風に、「自分の配偶者は須らく自分で求めるに如かず」と許り、暇さへあれば帝劇又はステーションへ出掛けて酒と驚嘆するほどの美人を物色してゐた。然し仲々見附からなかつた。兎角するうちに四年の年月が経過

した。それでも彼は屈しなかつた。相變らず暇あれば其處らを物色して歩いてゐた。

所がツイ先達、友人が大阪へ行くので其れを見送りに東京驛へ入り、聽て切符を買つてプラットホームへ出た。二言三言友人と別離の挨拶を交換してゐる所へ「あッ此處だわ」と云つて、一人の品位あるお母様と令嬢とが、二等室の一隅からヌツクと出てゐる半白の老人の顔を見て「まア」と云ひつゝ進み寄つて「遅れまして」と叮嚀に挨拶した。老人は「ヤアどうも御遠方恐入りました」と答へつゝ喜ばし相に首を下けた。その場所が恰度藤田君の位置から二間位しか離れてゐなかつた。

列車の出發には一寸時間があつた藤田君は友人と語り合ふ丈け語り合つた後、もう喋べる材料もなくなつたから最早出發の時間を待つ許りだつたのであまり友人と顔と顔とを見合せてゐるのもきまりが悪かつたから、其の眸をツイ外ら

して了つた。

其の外らされた所が、恰度令嬢と母君が半白老人に挨拶してゐる所だつた。

「アッ!! と藤田君は思はず聲を上げた。同時に再び眼を皿の様に凝視した。あゝ何たる美人だらう!! あゝ何たる端麗さであらう!! 之ぞ洵に自分が今日の日まで探ねあぐんでゐた理想の婦人だ!! 斯う思ふと何故か全身の血汐と云ふ血汐が心臟目がけて波打つて寄せて來た。あゝそも今日は如何なる吉日ぞ、此の我が友人こそ當に福の神だ、此の友人が今日この時間に出發して呉れたればこそ初めて此の世にも類なき美人を發見することが出來たんだ、嬉しい、嬉しい。此塵嬉しいことは無い、自分が生を此の世に享けて死ぬ迄の數へ切れぬ楽しい春が一時にドツと押し寄せた思ひがしたので、肝心の見送り友人は斯うなると全くそつち退けになつて了つて、

「君! 僕は君と別れるのが悲しいよ」どころで無く、突然友人の手を確つか

り握つて「嬉しいッ、嬉しいッ」と無茶苦茶に振り廻はした。何も知らぬ友人こそいゝ災難で、自分と別れるのが其處に嬉しいのかと思ふと、聊かブーンとせざるを得ぬ。その裡汽車はビーと動いた。

藤田君は慌てゝ急に「や失敬」と云つた切り。そして身動きもしないで其の母娘は幾度も幾度もだん／＼遠ざかつて行く半白老人にお辭儀をしてゐたが、全く其の顔が見え無くなつて了ふと同時に、漸く我れに返つて「さア敏ちゃん(假名) 歸りませう」と母は娘を促がした。娘は唯々とした。二人は悠るやかに歩を運んだ先刻から一心不亂に見詰めてゐた藤田君も漸つと氣が附いた。そして恰も吸ひつけられた様に其の後から隨いて行つた。

彼は其の途中幾度か令嬢の後姿のよさに驚嘆の叫びを上げざるを得なかつた實に天下第一品だ、見よ、あのスタイルのよさ、品位の氣高さ!! もう之ぞ吾が理想の妻だ、此の妻ならば己れは財産も要らぬ名譽も要らぬ、金縁眼鏡も要ら

ぬと思ふた。

ブラットホームを出た母娘は聽て待たせてあつた俣夫を手招きした。そしてサツと身を載せ、娘の俣を先きに走らせ、次に自分が之に續いた。此の様子をボカンと見てゐた藤田君は今まで夢現の如く幻の如く映つてゐた美しき幻影が今や自分の眼界から全く遠ざからうとするので氣が氣でなく「あゝ何うしやう何うしやう」と胸搔き拂しらるゝ思ひで遙かに遠ざかつて行く俣の後をチーツと見詰めてゐたが、聽て何思ひけむ「ウムさうだ」と合點するが早いか「俣ッ」と息づかひ急がしく俣を呼んで、ヒラリと飛び乗り「あの俣の後へ」と一散に走らせた。俣夫は梶棒握つて韋駄天の如く追ふた。

先の俣は東京驛前の停留場から馬場先門前を過ぎて日比谷に出で、更に三宅坂方面に折れ青山指して駈ける、藤田君の俣は勿論それに續いた。

聽て宏壯な邸宅の前で母娘の俣は止まつた。かと思ふと二人は淑やかに俣から

下りて「御苦勞」の言葉のみを残して奥へ入つて行つた。

「此家だナ」と藤田君は急に自分の乗つてゐた俵を止め、電燈をすかして表札を読み、素早く住所番地を記憶して之で満足と許り俵をその儘自宅まで走らせ俵夫には過分を與へて其の勞に酬るて歸らした。

翌日藤田君は一切を詳しく原尾に物語つた。そして何分の助力を乞ふとひれ伏した。原尾君は他人の世話をすることが大好きな男である。一切を聞き終つてからトンと胸を叩いて見せ「よし引受けた」と許り、直ぐ立上がつて教へられた其の家の附近へ行つて、あすこの御嬢様は何處の學校へ行つて被居るんですかと訊いた。すると第三高等女學校を今年卒業なさいましたと或る奥様が教へて呉れたので、めたと許り、幸ひ校長が自分の知己なので、又其の足で學校へ赴き、校長に逢つて一伍一什を語り「さて何卒貴方が一つ媒約になつて貰ひたい」と肉薄した。すると、校長は美しい白髪あたまを撫で「そりや困る」

と手を振つて「もう若い人の話には老人の出る幕ぢやない。貴方々で話して御覽なさい、あの御嬢さんは斯うした方です」と云つて校長は其の令嬢を説明した。

それに依ると其の令嬢は五年間學校は無缺席の皆勤で、然かも一年から卒業するまで最優等の成績で、操行は勿論上下の模範と仰がれ、容色の美しさは云はずもがな、背の高さに於てスタイルに於て之れ又學校一。更に家庭はと云へば有名な資産家、世に斯塵に揃つた者は珍らしい。

之を聞いた原尾君飛び立つ許りに喜んで、すぐ藤田君の宅へ行つて此事を報告すると、藤田君は「男と生れた冥加に斯かる淑女を妻に得るならば末代までの譽ぞかし」と原尾君を上座に据えて伏し拜み、君に交はつて茲に幾年、君もし物の哀れを覺し召さば助けてたべ、救ふてたべと涙を流さぬ許りに又頼み込んだ。

「よし必ず成就させて遣る！」と原尾君は例に依つて胸を叩いて見せ、直ぐ俵を呼んで青山の笠原邸(假名)へ向つた。何々女學校教諭と云ふ名刺を出して御主人にと云ふと、直ぐ應接間に通された。暫らく待つてゐると、聽て應揚なる主人が現はれて来て、落着いた口調で、

「お待ちせ申しました」と云ふ言葉の裡から品位既に四邊を拂つた。

「さて私に用事と云ふのは？」と主人は改まつた。

「ハッ」と流石の世話好きの原尾君も其の威嚴に打たれて暫し逡巡の體であつたが、遂に意を決して一切を物語つた。最前から一句も洩らさず耳を傾けてゐた主人は、原尾君の總ての物語が終つた後で、

「お話の點はよく分りました。然し悪しからず思ふで下さい、折角ですがキツバリお断わりします」と悠やかに然かも嚴として云つた。原尾君は、何しろ自分分は結婚談では今迄幾十度とない經驗を持つてゐるんだし、それに己れは雄辯

であるから大概な他人を動かすことが出来ると確信して遣つて来たんだから斯う返事された時の失望さはない。暫しは「こゝはお國を何百里離れて遠き滿洲の」見たいな淋しい悲しい氣分に打たれて俯むいて呆としてゐるが、斯くてはならじと勇を鼓し、

「それぢや其の理由は？ 御参考までに聽かせて下さいませんか」と云ひつゝ顔を上げた。すると主人はヤオラ身を起し、

「大體早い話がステーションで見染めたから娘を呉れ、其麼簡單なことで大切な娘を差上げることが出来ますか。假りに貴方だつたらオイソレと承知しますか、之で失禮します」と云つてスーツと奥へ入つて了つた。原尾君は斯うなると取つく島もなく、冷えたコーヒをグイと呑んで惰々と外へ出た。そして藤田君を訪ねた、藤田君は待ちに待ち切つてゐたのであらう、原尾君の顔を見るが早い。

「オイどうだ？」と突然胸倉を取らむ許りにすり寄つた。原尾は力も勇もなくたゞ黙つて自分の指で自分の顔をさし、

「此の顔色を見たら大概様子が分るだらう」とガツカリ云ふ。

「どうもあんまり良好な徴候ではないな。」

「良好どころか、君」とグーツと力を落して、

「君、倒れて呉れるな確かりせい、いゝか、まア此の話は諦らめ給へ、僕かアもう失敬する、左様なら。」

「オツと待つてくれ、待つてくれ、君に其度量見を出して貰つちや、残された妻や子は、いゝやその残された此のほ、ほくが可哀相ぢかないか、一體どうだつたんだ、さアもう一度座り直して、き聴かせて呉れ給へ、よ、よ」

「君、そんな泣き聲を出して貰ふと僕かア胸一杯になる、君！ セチ辛い世の中ぢやなア。」

「世の中の事は何うでもいい、一體何うだつた？」

「さらば汝憐れなる友よ。」

「もう君が左様云ひ出すと早や胸がドキンとする。」

「ドキンとするのに無理はない、話は物の見事に断はられた!!」

すると藤田君「え？」と聞き直すが早いか見る見る眞青になつて、

「え、本當か、虚言云ふと承知せんぞ。」と眼色が變つて來た。

「眼色が變つても駄目は駄目。あゝ箱根の山は天下の險——」

「唱歌どころぢやない。一伍一什を訊かせて呉れたら。」

「ウム聴かす、汝憐れなる友よ。」

「そりやもう分つた、それからが、き、聴きたいんだ。」

「そ、その泣き聲を出されると己れが困るんだ。それぢや仕方がない、話してやらう。そら、先刻僕が俥に乗つて揚々と出掛けて行つたらう」と、いふを冒

頭に、原尾君は詳しく會見の顛末を述べた。一切を聴き終つた藤田君の顔色は全で、北海道の餅が干乾にされる様なうらめしい表情をした。そして漸つと青息の下から斯う云つた。

「ちや此の話は全然駄目だらうか？」

「さア——」と原尾君餘程懲りたらしく餘りいゝ返事もせぬ。

「君、古語に云はく艱難汝を玉にす、東郷大將曰く各人それ奮勵努力せよ皇國の興廢……」

「もう云はなくつても其れ位のこととは知つてるよ。」

「君、此の一擧にありだぞ。願くば君にして友情益々濃かならむか、七度び立ちて此の汝憐れなる友を救ひ給へ。」

「所が先方の云ふ所又一理なきにしも非ずだからね。」

「その一理を説明するのが君の技量だ、それ此の通り頼む、拜む」と藤田君手

を合さむ許りにする。

「よし君がそれ程に云ふのなら僕再び立たう君宜しく枕を高くして可也。」

「ところが餘んまり枕を高く出来んぢやないか、快々として樂まぬ夢ばかり見るだらうなア。」

「心配するな、僕は明日録を新たに於て至誠以つて神を動かして呉れる。」

「頼んだぞ、確つかと。」

「よしッ、ちや失敬。」

「ちや失敬、フレー、フレー媒約さんッ。」

原尾君は翌日又赴いた。然し依然として先方の言分は變らなかつた。けれども原尾君は其の翌日も亦其の翌日も根氣よく訪ねて衷心を披瀝した。矢つ張りそれも不調に終つた。又々其の翌日彼は遂に藤田君を連れて訪ねて行つた。生憎その日主人は不在だったので、母君に面會を求め、そして二人心から頼み入つた

○流石は他見男さん

他見男さんのお宅へあがるに、五合も入りさうな大コップに溢れる様に
満々とお茶を出される。ヒヤアと驚くと「度々お茶入れにワイフが出て來
ると、折角の面白い話が頓挫するから」と仰言るが、左様ぢやなくて可い
と奥様を煩はすのがお厭なんでせう。大抵の人は三分の一飲んだらヘト
くになるに云つて他見男さんはカラ／＼と笑つてゐた(某誌掲載)

日本よ、さらば

☐ 船は静かに、故郷よさらば

一世の好男子エチ茶岡君は愈々二日正午天洋丸で洋行と御座る、彼は其の神妙なる鼻のあたまを丸く撫でながら「ハツハ、」と収まつた所、眉目彌々益々秀麗たらざるは無い。此の好男子を見送るは一は我々の名譽となし、一は又我々の光榮とする所ぞとその醜きも、その一寸見られる顔も論なく大に彼が行を盛んにすることに衆決忽ち一致した。

当日、僕亦此の佳人の爲めに朝まだきボーンと飛んで起きあがると云ふ壯舉を演じ、素早く洋服に身を堅めて「それッ」と許り見送りの光榮を擱んで、人後に落ちずと云ふ勢で「天洋丸へ、天洋丸へ」と全で自分が洋行する様な意氣込みだ、新大久保驛より横濱さくら木町行の切符を買つて乗り込んだ。品川で乗換へた。そして「彼」が來てゐないかと切りに物色したが、それに似

たらしい様子の男にも出會はなかつた。「彼」とは安田君である。

安田君と己れは前日逢つた時に「明日君と僕とは品川で待合はさう、九時前後に」と堅く約束して別れたんだ、安田君は物々敷く「ウム」と頷づいて見せてゐたから確かに己れは彼れがもう待合せてゐて呉れてゐるものとして出かけて來たんだ。すると見えない、ぢやヒヨツとすると大將平生が平生で落着いた性分だから未だ出掛けないのかも知れぬと思ふたので、ブラットホームのベンチに暫しウムと構へて己れは腰を据えてゐた。

さくら木町行は幾度も幾度も來た、然しヂツと心急わしさを壓へ付けて彼の爲めに鎮座の勞を取つてゐたが、卅分も待つてもまだ來ない、時計を見ると十時が直ぐだ。「どうしたのだろ」と幾度か立つて階段を見詰めた、その氣配だにない。恰度そこへ又さくら木町行が來た、もう後は何うでもなれと許り心配の裡にもフラ〜となつてツイ乗つて了つた、乗つてからも一車位待つても宜か

つたんだと後悔して見たが追付かぬ、まよと許り控つかと尻を落着かせる。前夜三時近くまで原稿に夢中になつてゐた故か馬鹿に喰が重い、兎もすればウツラ／＼とするので眼を閉ぢて寝ようとしたが、列車の中では嘗て一度も眠らうと試みて眠りに就いたことがない程過敏な神経の所有者ときてゐるんだから勿論成功する所でない。兎角する裡にさくら木町へ着いた。さうだ茶岡君の横濱の支店の住所はノートに書いてあるんだからと、ポケットを探つた所生憎どうしたものか見附らない、それぢや昨夜机の上においた儘置き忘れて了つたんだらうと、困つた哩と許り頭を抱えた。アツ此塵時には電話帳を調べるに限ると思ふて、彼の商會の名を浮べて、驛前の自働電話室へ駆け込んだ、生憎一人の女が電話口で焦つた相に怒鳴り込んでゐる、構ふもんかと、そこにあつた電話帳を手執るが早いか繰つて見た。すると果して一見明瞭。それを忘れぬ様にと口の中で繰返し繰返し又驛内へ駆け

け込んだ、雨がザア／＼降つてゐたからだ。暫しボカンと空を見詰めてると、

「旦那、俵ですか」

ハツピを着た俵夫頭が云ふ。

「オー俵だ」と無意識に應ずると、サツと小手を高く翳すと見る間に一臺の俵が飛ぶ様に來た。ヒラリと其れにフンゾつて「本濱町へ」と命する、俵は韋駄天の如く走つた。

下ろされて扉を排して入つて行くと、

「オウ皆塵は貴方を待つてゐるんですよ、早く二階へ」と云はれて吃驚、それぢや何時の間にか安田君も來たのかと上つて行くと、果して、

「やあ遅かつたな」と第一に聲かけたのは安田君だ。「大分品川で待つたんだぞ」と愚痴ると「君が遅いのでお先きへ失敬した、まサイダでも飲みたまへ」

ぢや罪は寧ろ僕にあると頭を掻いた、主人公茶岡君と「やア」やアの撃剣の掛聲見たいな挨拶を交換し、更に一同にスーウ。

眼の前の机の上に所狭きまで並べられたサイダーの一本を手にするが早いカボンはばらいて、コクン／＼音させて飲み乾す間もなく、

「それぢや之で皆塵揃ふたから」と立上がる。自動車にしようかと云ふ話があったが、埠頭まで餘り近いので、それは馬鹿らしいとあつてテクルことになる茶岡君のみは「諸君お先きへ」と許り幌の中から聲をかけて飛んで行つて了ふ雨は細かくなつた。

氣持ちのいゝ税關内の石疊を踏んで行くこと二町ばかり、見ると其處に成る程形容詞に偽りもなき山の如き天洋丸が横附けにされて乗客を待ち構へてゐる。

「此船かい」と分り切つたことを訊く。

「ウン」と安田君は懶さうに返事したが、臆て「アツ君、乗船券を持つてゐるか

い？」と妙なことを訊く。

「乗船券？ 知らないよ」と怪訝な顔をする。

「乗船券がなくちや船へ上れないんだよ」

「フーン」と己れは急に頬べたをフクラがした。

考へても見たまへ、皆塵が愉快相に船へあがつて行く時僕ばかりが陸上にて指を叩へて見上げてゐるのかと思ふと、これ以上の「噫無情」があるかい。

己れは快々と樂しまん顔してゐると、安田君は支那に永くゐた故か稗文でも讀む様な難かしい顔して同情の眉をひそめてゐるが、

「誰か持つてゐるかも知れない」と獨り言云ひつゝ、後からゾロ／＼来る大勢に大聲あけて、

「乗船券二枚持つてゐる者は手を上げッ」

すると、細い顔の髻の長い男が「オー」と返事するが早い其の瘠せた手を沖

天高く翳した。

「もう心配はない」と安田君は己れを慰めて又歩いて行く。乗船券は汽船會社へ行つて親しく貰つて呉るんだ相な。これがなくちや船に乗れないとは今日始めて耳にした所だ。

船と陸との間に急造の橋が懸つてゐる、その上を多くの見送り人やら乗客やらが押すな押すなの有様で行く。僕も亦乗船券を手にするが早いか骨格逞しい鬼でも挫く様な鬚男に其れを示して廳て又其の一員になつて上つて行く。試みに下をのぞいて見ると乗船券を持たない者共が物足らぬ淋しい表情で羨し相に見上げてゐる、ワイー。

先着の茶岡君の顔を見るが早いか一同「室は何處だ、何處だ」と群がり訊ねる。「君等是一等の而かも特別待遇者の室を見たことはないだらう」と茶岡君は鼻うごめかして先に立つ、ゾロ／＼と隨いて行く。

「さア此處だ、後學の爲めに見ておけ」と云はれて覗いた部屋は三疊敷程の廣さ、隅には上と下とに寢臺がある。正面に大きな鏡が此の突然の侵入者の多くの珍らしい顔を面白相に寫して御座る。

「君の寢臺は？」と訊ねると、

「下の方だ、二重ベッドだよ。」

「オヤ、ダブルベッドだ、それぢや君一人ぢや大に物足らんだろ」と彌次る奴がある。

「イヤ大に今日までの餘韻爛々たる薫香に甘んじてゐた方が却つて有難いかも知れぬ。」

「捧持して餘香を拜す——君は先づ菅公の資格を備へてゐる。」

「して見ると此の菅公は洋服は着てゐる、英語は自由自在、流石は大正の菅公だ」とスウと首を長くして、

「その腰掛けも臨時のベッドだよ」と反対の一隅にある腰掛を指さし、
 「船舶拂底、乗客充滿の聲は遂に斯かゝことを餘儀なくせしめたんだね、それにしては其處で寝る人は氣の毒だ」と茶岡君同船相憐れむの同情聲をあける
 一同「御尤も」とばかり謹聴した。

「西川君、西川君」と後から肩を叩くものがある、見ると達田君だ。

「君、圖書室や食堂を見たか」

「イヤまだ、案内して呉れ」

「ぢや隨いて来い」と、多くの見送人から僕のみを引抜いて行く。歩いて行く毎に己れは幾度か「アツ」と驚愕の聲をあけた、全て輪奐の美を極めたホテルの様な設備だもの、立派な階段まである。絨毛まで敷き詰めてある、軍艦とは流石に大に趣が違ふ哩。

食堂も圖書室も成程いつか見た汽船内の設備を書いてあつた雑誌の寫眞の通り

だと思ふた、そして僕は何時此處所で本を讀める様な洋行が出来らうと思ふて、名残りにと記念にと一寸坐つて尻の印象をつけておいた。
 達田君は序でに二等室までも案内して呉れる、一等と較べたら何んとなしに見劣りする、矢つ張り四百何十圓と二百何十圓との旅費の相違を部室に現はしてゐる。

最後に何も見學だといふので船底近い三等室まで覗きに行つた、そこには豚の様人間がゴロ／＼大勢各自の寢臺の上に轉がつてゐた、異様の臭氣がブーンと鼻を打つ、そして全で蒸し殺す様な暑さだ、よく辛棒出来るものだと思ひし引上げた、三等室は風俗懷亂を恐れてか男と女とは全然別室にしてある。彼等は幾十人一緒の部室にゐるんだ。それから見ると二等は隔世の感がある、況んや一等に於ておや。全でホテルの客と木賃宿の客みたいな相違だ、人種差別ぢやない金種差別から先づ唱へねばなるまい。

「オ、苦しかつた」と達田君と僕とは思はず胸をトン／＼叩いて甲板へ上つて来た。

「矢張り乗るなら一等だね」

「切に同感だね」と口々に云つて甲板の尖端から尖端へと一ツ一ツに好奇心の眼を光らせて歩いてゆく、中頃へ来るとマレイ人やら支那人やらが甲板を埋めてゐる、彼等老若男女の群れは或は坐り或は立つて、怪訝相な眼付で僕等を凝視した。下等船員か？ それなら女や子供は必要がない、して見れば矢張り米國へ出嫁ぎに行くんだろ。一躍千金は皆彼等の胸に宿つてゐる玉條だらう。西洋人は？ と見れば大低甲板の鐵柵に倚りかゝつて面白さうに話してゐる、或はベンチに腰を下ろして煙草を燻らしてゐるものがある、そこへ一人の日本人が巧みな英語を使つて密そりカフスポタンなどを賣り付けてゐる、仲には手に執つて見る者もあるが大低は首を横に振つて御座る。

「オー悉皆忘れてゐた」と云ひながら茶岡君が飛んで来て、

「達田君、甲板の僕の安樂椅子の交渉が済んでゐるか」と息セキ問ふ。「オウ、もう疾づくに」と云ひながら達田君は茶岡君を案内して先きに立つて前甲板に導き、そこに所狭きまで並べてあつた椅子の一つを指して「これだよ」と云つた。

「イヤどうも有難う」と茶岡君悉皆満悦の體だ。

誰れでも使つていゝと思はれる甲板上の安樂椅子でも矢つ張り使用權を申込みなくちや指を叩へて甲板上に立つてゐなくちやならぬのだと云ふ、どこまでも金の方で無くちやビクとも動きやしない。

突然、ガラン／＼と鳴る。もう見送人の下りる時刻だと達田君は囁いた、多くの洋行出来ない連中の腰は急に浮き立つた。三人は陸上に向つた甲板上を歩いた。

「オー肝心の茶岡君が何處へ行つたのかと心配してゐたら」と云つて、見送り人はドヤ／＼と茶岡君を圍んだ、それに一々挨拶してゐる刹那の感慨は流石に無量であつたらう。

「西川君一寸」と安田君は腕を引張る。

「え？」と引張られて行くと、安田君は甲板から下を見下ろし、

「あれをヂツと見てゐるたまへ、その裡屹度ボロボロと泣き出すに違ひない、君は斯う云ふ刹那を大に研究しておく必要がある」と罪なことを云つて多くの乗船券なしの連中の仰いだ顔を指しながら云つた。

「面白い光景だな」と面白さうに己れも見下ろした、成程眼玉が赤く張れてゐる者もある。ハンケチを押し當てゐる者もある。ケロリとした顔もあればへツへツへと笑つた顔まである、内地雑居顔だ。

第二のガラン／＼が鳴り響いた。

「さア下りるよ」と誰れ云ふとなく云ふ。茶岡君に近いものから「御機嫌よう」

「御大事に」が始まる。その裡僕の番になつた。

「頼んでおいた通信は確つかといふか」

「分つた、特別勉強して」

「ぢや御機嫌よう」と僕の手は堅く握つた。

ゾロ／＼と押され／＼と急造の橋を下りて行く、鬼みたいな容貌怪偉な例の男は矢つ張り立つてゐた。

船から總て吐き出されて了ふと、橋は直ちに取外された、もう何んと闘いても觸れることが出来ない。雨は相變らずこまかい。

藏光君と僕とは他の見送人と離れて少しく後方に陣した、そして先刻上から見下ろして嘲笑した泣面の一員になつて甲板の茶岡君を見上げた。茶岡君の人品は最負眼ぢやないが一等光つてゐた。

どこから流行したんだらう、どこの國から始まつたのか、その時甲板の各乗客からドン／＼紙糸が下へ投げられた。その投げられた一端を掴んで上と下との人間は其れを唯一の別れの最後の絆として離さない。見る／＼赤紫の無数の紙糸は入れ亂れ／＼美歡譬へむ方もない。一人で十幾本も掴んでゐる乗客もある。マニラから歸航らしい薄黒くマニラ色に變色した西洋人の老夫婦は最もハツシヤイでキャツ／＼云つてゐた。ひとり其の中に前甲板にゐるた溶かす様な眸を持つた若い金髪の女のでやかさと、後甲板に鐵柵にもたれて人々の別れに打ち騒ぐ様を他所にしてチーツと鳩の様に眼を張つて雨にしぶる横濱の街を名残惜し相に見詰めてゐた万感搔き迫るの思ひを含んだ金髪の女の姿は私をして再び凝視せしめることの出来なかつた程哀れにも美しい情緒だつた。私はそれを一眼見て何か知ら胸一杯の想ひがした。

突然、けた／＼ましい汽笛が耳を聳する許りに鳴り渡つた。と、別れに相應はし

い哀調を帯びた「ほたるの光り」の樂隊が乗客の胸にも見送り人の胸にも浸み渡る様に流れた、氣の弱い女連中は早くもハンケチを眼に當てた。

さア愈々ぞと眸を上ぐれば今まで笑顔で應對してゐた茶岡君の顔は見る／＼緊張して、流石に名残の惜しまれてか眉宇の間に微かに愁雲を漂はせ、帽子を高く翳して、一人々々に深長に別れの挨拶を交換する容姿のよさでない、其の態度の鮮かさ、立派さ、それが皆自然である、己れは感に入つて見惚れて、最後に慌て／＼帽子を脱いだ。

巨船は静々と動いた、殆ど動いてゐるか何うか分らぬ位な微かな微動である。赤紫の紙糸は次第に張り詰めた。

誰れの口からとなく「萬ざーい」と、その聲は悲壯に空氣をゆるがせた。すると之を相圖に乗客も見送り人も期せずして雨の中から帽子を脱いで高く／＼振つた。紙テップは次第に前方から切れて行く、だん／＼切れて來た。遂に茶

岡君と僕の持つ糸に其の運命がきた。張り詰め張り詰めた糸はブツリと音がしたかと思ふと上と下にサツと舞ひ上つた。二人は見合してニツコと最後の別れに笑むだ。

(次からは其の茶岡君からの通信である、洋行する人の参考の爲め特に掲載して行く。洋行出来ない我々は之れで大に知つたか振りを養成する積りなり)

◇我輩日本人を捉へて

第一信。

他見男君、

出發の際は君等は揃ひも揃ふて泣き眞似して、表情たつぶり悲し氣に見せかけてゐるたぞ。甲板の上から君等のゐる所までズツと低いので、僕を旨々その手に

乗せてボロボロ落させる畫策だつたらしいが、其の手は喰ふもンかい。

端然として軽く帽子を振つて應答した所、鮮かな手際だつたら、西洋人だつてあゝ云ふ旨い調子にや行かないぜ。君も洋行する時あの呼吸が肝心だよ。

さて東洋の貴公子殊に僕を乗せた巨船天洋丸が、千種雑多な客種を乗せて静々と横濱埠頭を離れた。斯くて君等が蟻の様な小さい人間に見えた時僕はやつと甲板の籐椅子に身を落着けて、シガーに火を點けた、そしてスウと思ふ存分吸い込んで、フウと又思ふ存分吐き出した、あの一吸ひはまさに千金の價あらしめたね。

港外に出た所、何故か船はピタリと泊まつた、不思議だぞと西洋人共に附和雷同してガヤ／＼云つてると、三等客に急病人が出来、然かもそれが稍重態だと云ふので、病人だけを戻して了ふんだと云ふんだ。お蔭で一日の假泊となつた故國を離れむとする身とて流石に幾分の嬉しさを感じた、矢つ張り後ろ髪を引

かるゝ所あつたりと見えたり。

俄か仕立のハイカラで音楽に伴はれて（所謂鳴物入）で食堂へ堂々構へて入つて行つたまでは上出来だつたが、デンナーの献立表が丸つ切り分らず、幾度か知つたか振りをしやうとしたが此の風采が其れを許さず、仕方がないので隣客の注文を穴賢と許りかしこみ敬ひ、ツンと取りすまして「僕も御同様」と體裁はいゝものゝ一から十まで御同様に獅嚙つく所、これでも日本橋では一番の物の分つた紳士だつたからね。

やアゐる、ゐる、内外の美人雲か霞かハタ雪か。何んでも美人には最善最高の町重を盡したら上紳士を以つて遇せらるゝと聽いてゐるから、階段の上り下りは申すに及ばず今便所から出た許りと云ふ姿も物かは、女さへ見付ければ「ハハッ」と許り食客然とモチ／＼して道を譲る所、自分の嬪に見せたいものだ。知らず斯くして得るもの何んぞ、目下はまだ不明、その裡いゝことがあつたら

無線電信を奮發する。

船にはバザーがあつて何んでも買へる、不自由なし、風采も今まで見た中で僕が一番光彩陸裡、心配して呉れるな。（以上君等に見送られた其の晩、港外、天洋丸にて 茶岡生）

第二信。

他見男君、

鬼に角昨日の出来事を書く。改めて又云ふ迄もなく君の洋行に資せむ爲めだ。

ラ ツ バ

一時頃に久し振りですべて「大學出の兵隊さん」を思ひ出す様な軽快なラツバが船の隅から隅までズーツと響き渡つた。其の調べこそ違ふが、こりや屹度カキコメ／＼で、食事に違ひないと賢明なる我輩早くも推察したものゝ、大きな聲も出せぬが食堂の卓へは何う云つた具合に付くのか、このところ大に賢明で

ない。先づ此處時には斯界の先輩毛唐共の様子如何にと許り、食堂の前をフラ／＼偵察をやる。何か知らぬが食堂の右の入口は人々黒山の様ぢや。老若男女押すなくで一向内部の様子に眼が届かぬ。だん／＼時間が経つ、押され押されて小一時間も経つが悲しい哉いたましい哉一皿も有り附け相でない。思案に餘つて日本人の先輩（但し洋行での）の室へ行つて圓曲に其れとなく「食事は最早済みましたか」とやる。まだ／＼との事で二人揃ふて食堂へ進軍。ところが肝心の此の先輩も勝手不案内と見えて餘り要領を得ない。けに心細い先輩もあつたものだ。止むを得ず我れと我身の頬べたを振り上げてボーイに聴く。ボーイは「お晝は御隨意に」と云ふので其れではと逸早く卓に獅嚙付くと、再びボーイが来て一寸と云ふ、其の後から情けない顔して随いて行くと、例の食堂の右の入口の所に毛唐の事務員がゐて一々名前の上へチエツクしてゐる、成程それぢや此の男に姓名を名乗らなくちや武士は喰はねど高楊子になるんだつ

たかと、慌てゝエチ、茶岡と自慢の發音やると「オーライ」ときた。よしと許り再び食卓に座る。晩には厨夫長に話して、日本人の友人三名と一日本婦人（森村商事會社員令夫人）に僕と都合三名で一テーブルを航海中使用に定めた、是で先づ／＼今後食事にかけては泰山の安き思ひぢや。

献立表

（一時にドツと押し寄せたら假令廣いと云つても狭い船中大マゴにマゴつくつと云ふので第一回と第二回の二度に別ち、一回と二回との間に四十五分を距つ）献立表は参考の爲め二三枚集めて送る、大に有難く思ふてくれ。

我等幸に卓を日本人同志で取つたので、吾々のそれ等日本人と云ふ肩書連中、今は誰に恥を受ける虞れもないので、急に氣が強くなり、研究だア研究だアと研究を無茶苦茶に振り廻はして「之を喰つて見よう、之にしやう」とボー

イを奴隷の如く追ひ廻はして研究的態度に没頭してゐるが、メニュー丈け附きつけられたでは何が何んだか分りやしない、オイ察してくれビフテキ、オムレツ、カツレツ、ライスカレーの西洋食の名を碌に知らぬときてるんだから、他人が旨さうに頬張つてゐる様子を横眼で睨みながらモジ／＼してゐるばかりで、注文しやうにも注文する肝心の名を知らぬとは何ちうみじめなザマだろ。あゝ東京戀しや別れの辛さ。

バ　　ー　　ス

便所へ行くと一人の老毛唐が何やら間違つきぬいでゐる。僕が其の側を通り過ぎ様とすると、訴へる様な眼付して、拙手な日本語で「お湯」とか何とか發音したが、其處事は此方の小便に何等の關係がないと云ふので、知らん顔して過ぎて行くと、大將ムツとしたのか、誰れが見ても歴乎とした我輩日本紳士を捉へて、英語で「あんた日本語が出来ますか」と皮肉つたも皮肉つたり、僕はク

ーッとしたしたので矢つ張り英語で慇懃と而かも田舎辯で「日本語なんてサツバリ知らねえだ!!」そして悠々尻目にかけて引上げてやつた。此の老毛唐の間諛つくも無理はない、各人が若しお風呂を欲したなら、豫めバースポイに其の時間を通告しておいて、そしてポイの「オーライ」と云ふ報らせに依つて始めて立つて行くのだ、それを老毛唐さん少つとも知らなかつたと見える。毛唐の癖に其處分り切つたことを僕日本人に聴く奴があるか。もう船が出るらしい、急いで筆を擱く。(三日朝、天洋丸にて 茶岡生)

☒黒髪よ、香ひよ!!

他見男君、

三日の午後船は太平洋に出ました。紺碧の深い色をした海は唯波の小山の連続である、高い甲板から船の行手を見て居ると、丁度飛行機から起臥する山脈の

上を見下す時は斯くもあらうかと思はるゝコバルトの深い色した輝いた小山が動いて寄せては去り、去りては寄せ来る上を二万三千噸の船はスルリ〜と滑つて行く。此の水の山こそ幾千年來の色であらう、然しながら之が我が住む地球の上だと思ふと、大崎の僕の居宅の庭の芝生に對する様な一種の愛着の念禁じない。

突然此の碧藍の小丘を飛ぶ水晶の鳥がある、其形は小さいが其の力強い飛揚の鋭さ!! 彼等は無限の生命を持つかに見える、二三四又五其の翼は透明、其の體は淡緑、何んと云ふ清い姿であらう。是が飛魚だ。

此の透明島の去つたあたりに突然黒色の巨軀でヌツクと立つた脊鰭を有する海魔が弧形を畫いて波間に出没する一二三、五、十、二十群魔は或は近く或は遠く船に添ふて進む 大鮫である相な。

何と云ふ潤い海の懐であらう、彼等は幾千年來の此の海に棲むと見える、嬉々

として戯るゝが如く又怒つて襲ふが如くである。自然は廣い、そして自由だ。斯魔事を考へてると突然遙か彼方の波間に木の葉の如き漁舟が見える、シガアの烟の如き淡い烟を上げて矢の如く進む、三隻四隻舟は巨浪に上つたり沈んだり是は人間と云ふ動物の運動である。

今迄飛魚の精銳に驚き、海魔の頑大にあきれた目は新たに人間の大胆を嘆ぜざるを得ぬ。魚も魔も人も共に自然見である。彼等は之れ皆生類である。

此魔事を考へながら甲板を見ると其所には又人形の如き愛らしい毛唐の小供が毛布に包まれてスヤ〜と眠つて居る、天國なる哉。

洋魔!! 之は太平洋上の魔ではない、天洋丸上の魔だ、如何に美しく飾り立てても彼等の顔面に表はれた無智と荒寥の象徴は容易に其の常の婦人でない事が分る。年の頃は皆二十二三歳、顎から襟元かけて雪白に塗り立て、頬から上はローズ色に紅を施し、裾短かな絹の衣に高い踵。甲板の遊戯に巧みなのは常に

洋上を往復する證據であらう。桑港までの四百圓の乗船料を拂つて猶且つ大に
 得る所ありとはサテく有難い御娼賣で御座る。水浴が始まると華な水浴着を
 着て男の中で其の大尻を動かして仰向けに泳ぐ。子曰く非禮勿見と。僕は引
 上げて来た。(天洋丸上 茶岡生)

他見男君、

僕の前に一人の美人が居る。但し日本の女なり。毎日海ばかり見てゐて少々此
 の頃快々となつた僕は淺ましい哉此の年齢してゐながら、矢つ張り寂寥を慰め
 る遊戯心からか時ならぬ戀心が萌した。何よりの證據は其の女を甲板で一日逢
 はねば千日の想ひがする、この僕をして其れまでに思はすんだもの、以つて如
 何に美人たるかを幸に諒せよ。

何よりも僕は綺麗に真中から別けたあの黒髪が氣持ちがいよ。

僕は今通信室にゐる、彼女も有難いかな時々僕に媚ある眼付を呈しつゝチヤ

ンと眼の前に向ひ合ひで座つて何か認めてゐる。黒髪よ香よ!! あはよくば其
 の一寸もたけるお顔を伏し拜みたい許りに僕は素知らぬ顔して此の室へ来て、
 さあらぬ體でおん前を選んだんだ。つらく推みるに少々喝れてゐた觀ありだ
 ね。

「奥様、お茶が入りました」稍してボーイが来た。「ハアさう？」と彼女は淑か
 に半ば微笑を浮べて立つた、裾模様の絹の衣をシユツと捌きながら、僕に軽く
 頭を下けて去つた。去つてから僕はガツカリ何も書くのが厭になつた。斯うな
 ると同船の三井のA君が羨しい、彼は彼女と自由に會話する特權を持つてゐ
 るんだもの。

彼女の美はソモ何處にあるかに就て一寸申上りたい光榮を有するが、情けない
 哉僕は君みたい形容詞を巧みに使ふ素質の人間に出来上がつてゐない、美は
 恰もそれ憚の悟の様なものだ、何故ならば直覺すべきものであるからである。

だから之を生じつか説明すると、あはれや實物に距たること千里猶遠しの感がある。然し次の方程式に依つて先づ以つて大略の想像を願ひたい。

黒髪は澤山＋眞中分ケ十二重験＋鼻高＋口締＋笑窪＋腰柳＋指白魚＋大ダイヤ
 二十二三才＋高雅＋聰明

僕は布哇で聞いた「月夜の虹物語」に就いて書かうと思ふたんだ、然し今彼女が急にゐなくなつたのでガツカリ筆探る勇氣が出ぬ。

明日彼女を新たに見たその勇氣で一瀉千里で書く。(十日晩、布哇にて茶岡生)

☒金髪の處女がニツとして

他見男君、

夕食の時彼女は何んの意味か僕の客室の前に立つてゐた、あゝ嬉しや之れ感應の結果か。さりととも大に共鳴を感じたからであらうか。さア矢でも鐵砲でも來

い、急に元氣になつたぞ、此の勢で布哇名物「月夜の虹」はお茶の子サイサイでござい。

月夜の虹物語

望めば茫茫たる太平洋の上にまんまるい月が上ると、折柄西の彼方夕立の後へ鮮かな七色の虹が美しい橋をかけた、僕は今それを見詰めてゐる。

そも此の虹は昔しその昔布哇に絶世の美人が一人ゐた。ある王子がフと此女を見染めて執着おく能はず、遂に云ひ寄つて妃となし、宮中花香る庭園にバナ、より甘い戀の囁きに酔ふてゐた。

所が此の王子或日何思ひけむ決然立つて「余は聽ては此の國の王となる可き身なるに、美女に魂奪はれ何うするものぞ」と慨然として直ちに天下の形勢洞察と云ふ遠大なる志望の下に、意を決して遙か海を越へ遊學せむと此の由妃に物語つた。

妃は身を切らるゝの思ひで其の一言一句を聴いてゐたが、遂にはあまりの王子の決心の堅きに否みも出来ず「それでは一年間限りよ」と、恰も或女が横濱埠頭で僕に耳語した様に堅く約束して愛人の途出を送つた。

月日は茲に一ヶ年早くも経過した。

妃は今日こそは戀びと愛人の姿が見ゆるか明日こそ船は來たらむかと毎日海岸の岩に立つて遙かに小手を翳したこと幾度、それでも王子が歸つて來ぬので悲歎遣る瀬なく毎日泣きに泣き崩れてゐた。

一夜涙に暮れながら、月明りに照して海を見詰めてゐると奇怪や待ちこがれてゐた王子は海を涉つて歸つて來るではないか。やれ嬉しやオ、戀人よと突然我身忘れて縋り付くと、何時しか王子の姿がバツと消へた。オヤと思ふと又もや水上に姿が見える。今度こそはと緊かり抱いた其の人こそは慕ひ死するが如き想ひしてゐた王子その人にはあらで、聴くも怖ろしい大なる鱧であつた。

鱧は妃の裾を喰ひ縛るが早いか其の儘スーッと海の彼方へ〜と引張つて行つた。妃はさては此の魔者に瞞されたかと齒切口悔しがつてゐると鱧は最早此の邊まで來ればよしと思ふたのか倅改めて云ふ様「實は我れこそはお前の待ち焦れてゐた王子の化身である。聴いてくれ約束の一年を想ふて過日歸路についた所、途中で大風雨に出會し、その爲め船は沈没し、我れ再び姿を現はすことが出来なかつた。

今斯うして御身が海岸の巖頭高く立つて己れを待つてゐるのを遙かに見上げては迎てもチーツとして居られず、遂に鱧と成つて現はれて來た次第である、悪く思ふて呉れるなど、云ひ終るや否や其の喰へた妃の裾を空中に向つてカーツと吐き上げた、それぞ月夜の虹物語である。(今夜はこれだけ、十一日布哇天洋

丸にて 茶岡生)

他見男さん、

裏の繪ハガキ、此處が今夜の宿です。
御影石の山岳は晝は恰も白雪の様な肌ですが、暮れかゝる時淡い紫のペールを纏ふてゐる様な美しさです。

ホテルのメイドは水色の着物に白色のボンネットを着て御給仕をして呉れます
山の娘の健康と無邪氣で今夜のデннаの嬉しいこと。(グレシヤ、ポイントホテルにて 茶岡生)

他見男さん、

グレシヤのポイントの峯に、たそがれ時の薄い明りがほーつとしてゐます。八千尺と云ふ断崖に懸つてゐる千尺に餘る瀑布は闇の中から光る様に凄く落下してゐます。

高山のホテルのデннаはもう済みました、シガーを啣へて居ると、色彩のいゝ洋装の美人が何を感じたかニツコリ僕を見て行きました。

(著者曰く次の一文だけは帝大助教F君よりの來簡です、恰度茶岡君のと一緒に來ましたから、添へて置きます)

他見男兄、

ワシントンに來ました、誠に閑靜な、御役人ばかりの町です、此處には相生旅館と云ふ日本人の宿屋があつて漬物、茶漬、テンプラ、刺身、そば、何んでも御座れで毎日腹づゝみを打つて居ります。

洋食だとホンの御嬢様ほどしか喰へませんが日本食となれば六七杯は平け候也
美しき奥様健在なりや。

F 生

○豫審判事

饒の友人に神戸で豫審判事をしてゐた男がゐる。彼は豫審判事だから種々の被告を取調べたが、矢つ張り恐いのは殺人犯に向ひ合つた時であつた。或日彼は或る殺人犯に、大學を出てから間もなく隆々たる勢を以つて「その方は不埒な男だアイン」と怒鳴る様に詰問した。さア其の殺人犯は怒るまいことか「おのれ青二才め何を云ふかッ」と突然拳を極めて躍り上るが早いアイン豫審判事の横面を穴もあけと許り飛ばした。アレーと彼は驚くまいことか。彼は悉皆之に凝り／＼して以來取調ぶる被告が殺人犯であるを聞いたが最後、逸早く部屋のドアを云ふドアを皆廢明けッ放しにして、いざと云ふ場合のチヤンと逃げ路を作へ置き、その上更に被告の椅子と遙か二間も遠ざかつて身を構へ、之で大丈夫と云ふ確信を得たが最後、急に嚴かな姿勢を作つて悠然と被告を睥睨し、

「アイン白状せんか、剛情者めがッ」

あな嬉し、喜ばし

◇大學出の郡長さん

己れは今箱根塔の澤は新玉の湯の二階にゴロリとなつてゐる、そして昨日からの行動を顧みて思はず噴き出してゐる。

一體この旅行は全然妻の爲めに催されたものである、妻が先日おれを捉へて、「貴方は何時も旅行ばかりしてゐらしやる癖に一度も私を連れて出ないんですもの、今度は私と静子の二人限りでどこかへ行つて来るわ、女と云ふものは家にばかり留守番するものだ」と云ふ貴方の惨たらしい頭脳を見事に撃破して見せますから」と云ふ大變な權幕だ。考へて見れば己れも夫婦して別つ可き筈の樂しみを己れ一人で占領してゐる、洵に量見の悪い旦那様であつた。今斯うして座敷の真中で靜かに征められると成程己れが悪かつた。だから己れは、ム、ムと唸つた。

「幾程唸つたつて駄目ぢやありませんか、私に廿日間程お暇を下さい、どこかへ悠つくり行つて遊んで来るわ。」

「そんなに旅に出たいのか、旅と云ふものは決して君が想像してゐる程愉快なものぢやないよ、行つてみい、屹度己れの傍が戀しくなるに定まつてゐる、この己れでさへ君の傍に三日もゐないと、あゝ戀しきいととき我が妻はと想ふんだよ」

「もう其塵古い手には乗りません、男らしく行つて来いと云へませんか、わたし一度も家以外の所で宿泊つたことがないんですもの！」

「よしッ行つて来い」

「まア急に捌けたわねえ、斯くてこそ理解力のある旦那様と申すものなれ、西川他見男さん萬ざーい」

「ヘン」

「變な返事ねえ、ねえ貴方どこへ行きませう？」
 「どこでも君の勝手さ」

「さうね」と一寸小首を傾けて、

「それでは今から相談して呉るわ」と云つて、靜子を小脇に抱えて外へブイと飛んで行つたかと思ふと廳で直ぐ戻つて來た。屹度仲のいゝ猪狩さんの奥様や鈴木さんの奥様や、上田さんの奥様の御高見如何を求めに行つたらしい。

「わたし伊香保へ行つて來るわ、でも飯坂温泉がいゝと仰しやる方もあるし、それに伊豆の修善寺がいゝと薦める方もあるし、意見がまち／＼なの、孰方がいゝか知ら、貴方どつち好むある？」

「己れ？ 己れなら飯坂か又は伊豆の伊東へ行くさ、細野は飯坂最負だし、僕は伊東だ」

「そのうち孰つちがいゝの？」

「さア、飯坂は山の中だから、溪流汗々たるに耳を傾け様と思へば飯坂だ。

伊東は海上より涼風颯々と吹き來たり、肴はピチ／＼生きたのばかり。だから要するに君は山の景に觸れたいと思ふなら前者、若しそれピチ／＼が欲しけりや後者だ」

「どつちもいゝわ、でも第一貴方の意見は？」

「僕かア伊東だ」

「何故？」

「經驗から見て断定する」

「でも鈴木さんの奥様は飯坂がいゝと仰言つてよ」

「ぢや飯坂へ行きたまへ、俗臭紛々としてゐる相だ。」

「ぢや謹んで親愛なる我が旦那さまを信用して伊東へ行くわ。ですけど一人ぢや淋しいわ、ねえ貴方私しこれ以上親切にして下さいと申しませんから、伊東

「まで送つて来て下さらない？」

そこで己れは考へた。色々多忙な爲め此の月は何處へも旅しなかつたのだ。早速どこかへ出かけて氣を晴らしたいと思ふてゐた矢先だつたから恰度いゝ幸だ。それに女と云ふものは兎もすれば人に頼りたがるものだから、己れが此處で赤ンペーをしたなら、折角感興に捉はれた妻の心が、又ウンザリするだらうと思ふたので、聊か憐愍の情を催うして、「よしッ」と答へた。

「わたし廿日間行つて来るわ、貴方一人置いてけほりよ、御飯なんか三度が三度他所でおあがりになつて下さい、いゝこと？」

それも己れの承諾する所となつた。早速妻の里へ電話をかけて、母に来て貰ひ僕が見送つて歸つて来る迄の留守を頼み、萬が一あつたら大變だと云ふので貴重品は悉く行李に詰め、隣家の猪狩さんへ預けることに話は順調に進んだ。さう妻の喜びつたらない、これでこそ矢つ張り私が最初貴方と見合した時どこ

となく蟲の好く方だわと直感した丈けあつたわと、イヤに古い昔しまで引つ張り出して讚美の聲を絶たしめず、こゝ暫らく己れは顎を擦つて許りゐた。

愈々當日になる、行李は「えゝ確かに」と猪狩さんへ引き取られ、留守番に來た妻の母は、自分の腹を痛めて生むだ娘が温泉で暢かに暮らすと云ふ吉報だから、悪い氣持の仕様筈はなく老の眼に涙を湛へて「結構な旦那さまだ、物のわかつた御亭主ぢや」と拜まむ許りに感涙に咽んで喜んで呉れる、斯うなると我輩すつかり男振りを上げ、大に理解力のある旦那さま顔たらざるを得ない。

「ウム、ウム増枝や、温泉へ行つて来いよ、身體を大事にせいよ、思ふ存分遊んでおいでよ」と態と妻の母のゐる前で黄色い聲で、可愛がり聲を出して見せる。これを親しく耳にした母はもう眼を涙で一杯にして、

「コレ有難くお禮を云ふんですぞ、三千世界訪ねても此塵いゝ旦那さまはありやしないよ」と妻を捉へて、有難さを振り廻はして聽かして御座る。己れは萬

更悪い氣持ちのことでないから涼しい顔して聽かん様な顔して聽いておつて遣つた。妻め仲々伶俐に立ち廻つてゐる哩とばかり横目にかけて己れをデロリ。何分廿日間も家を不在にすると云ふんだから妻は大きなトランクに凡そ自分の着物の之れと云ふ品は入る丈け詰め、それに無聊かき消す爲めにとあつて、好きな英書から歌集をギツシリ其上から詰めくもり、之で何か忘れものがないかとコクリとしてゐたが、もう無い思ふたかイデくお化粧の準備にかゝる。己れは其の日止むを得ざる用事があつたので後で品川で待ち合はすことにして一先づさきに家を出た。そして安宅商會へ行つた。生憎主人公の安宅君がゐない。どこへ行つたんだと女給に訊くと、今しがたまで神戸の湯淺さんと云ふお方と、中屋さんと云ふお方とお出ましになつた許りだと云ふ。

「へーえ、湯淺君に、中西君？ しッ、しまつたなアー、もう一足のことだつた」と己れは思はず歎息を洩らした。

湯淺君と云ふのは矢つ張り僕と同郷、然かもツイ近くの主馬町に住んでゐたんだ、神戸高商を出て、才幹は到る所で認められ目下は大會社の支配人である、己れと相見ざること殆んど十年。すつかり忘れてゐたんだが、先々月安宅君に近況を聽いてから急に逢ひたくなり一層どうせ暇な身體だから、態々神戸まで行こかと迄思ひ込んでゐたんだ。その湯淺君がホンの一足で出たとは何うしたこつたい。中屋重治君だつてそうだ。中屋君は確か京都大學を出てからもう六年位経つだらう、頭腦の非常にいゝ男で、高文を優秀な成績でパスするが早いか、直ぐ島根縣の理事官になつて赴任し、それから又同縣の郡長に轉じたかと思ふと、先日の官報で見ると臺灣總督府財務局事務官に榮轉してゐる。之も安宅君から聽いたんだが、中屋君は彼の日本三美人の一人大阪吉崎李枝子さんの姉さんの其の娘を貰つてツイ先達築地の精養軒で盛大なる披露宴があつたばかりだつたと云ふ。現に其の席に列席した安宅君は口を極めて、「中屋君の妻君は

實に美人だ、羨しい程美人だ。道理で中屋君最初から終りまでニコニコしてゐたつけ、今度逢つた際にやウンと冷評してやらなくちや」と云つてゐた。その中屋君は僕より確か級が一級上だつたけど、二人はお互に柔道をやつたのだから随分道場で組んだり組まれたり、負かしたり負けたりしたことがあつた。爾來幾年、沓として其の消息に接しなかつた所へ、此の近況だ。己れは矢つ張り「あゝ逢ひたいなアー」と切りに思ひ込んでゐたんだ。その中屋君だ、その中屋重治君が人もあらうに逢ひたい〜と思ひ詰めてゐた湯淺君と偶然と云はうか一緒に打連れて安宅君を訪ねて來るとは何たる奇遇だらう、その奇遇を一瞬にして遁がした己れの無念さたらぬ。

己れは暫らく呆として應接室の机に俯伏して口惜しがつてゐた。

それにして己れも今日は時間に限りのある身體だ、いつもなら長く待つてゐても構はぬが、今日はそれは不可ぬ。成る可く早く歸つて來て呉れりやいゝが

と暫らく待つてゐるたが、仲々戻つて來そうにもない、その裡だん〜時間が経つた。おれは時計と睨みつこで地團轉踏んでゐるたが、刻々迫まるタイムの壓迫に猶豫もならず、それぢや安宅君には歸つて來てから逢はうと決心して席をプイと立上がつた。その時、その時、扉の外からドヤ〜と靴音がした。やア歸つて來たなツと、瞳を嬉しさに凝らして見てゐると、サツと開けて入り込んで來たのは、

ヤツ湯淺君だツ。

ヤツ中屋君だツ。

「オーツ湯淺君ツ」

突然己れが斯う呼んだので、相手は己れの顔を何者と許りヂツと見据えた、その筈だ、十年も逢はないんだもの！

彼は繁々己れを見入つてゐるかと思ふと、グワラ〜と顔を崩して、

「オーツ西川君ぢやないカツ」と駈ける様に近づいたのを抱く様にして己れは「やーア、實に暫らくだねえー」と、グン／＼握り、

「顔が大して變つちやるないねえー」と互に見合はし、懐舊しきりなり。

中屋君は此の二人の様子をボカンと見てゐた。そして矢つ張り己れをヂツと見詰めてゐるたが、突然、横から、

「君は西川君だね」とジロ／＼見て云ふ。

「ウン、暫らくだつたなア」と感激に満ちて己れは云つた。

「悉皆親父顔になつたので、見當が附かなかつたよ。痛快な日だッ」

と、意外な所で意外な男に逢つたと云ふ表情だ。三人は無意識に腰をかけた。

「君は大に成金になつたと云ふぢやないか、早速奢つて貰はうか、ハツハ……」と聲高らかに湯淺君云ふ。

「イヤ君こそ成金と云ふ話だぞ」とシツペイ返しすると、

「いゝや、それよりも素敵な美人を貰つた中屋君を黙つて見送すことがあるものか、あゝ云ふ天下第一品の美人を貰つて我々を大に中毒させるなんて怪しからん男だよ、大に君からも絞つてくれたまへ」

「さうか、オイ中屋君、君は怪しからんね、何故もつと醜もないのを貰つて先づ先づ之でお互によかつたと我々を安心させなかつたんだい？」

「イヤ僕よりか」と中屋君すつかり頭を搔いて、

「君は湯淺君の妻君を知つてゐて其慶事を云ふのかい？」

「いゝや」

「湯淺君の妻君で、君そりやもう何んと形容していゝか、花か霞か、將た雲か……」

「將た墨かと來るんだらう」と湯淺君横から口を出す。

「實に美人だよ、それと較べたら僕の妻なんか」

「それ、それ、貰つて僅か十日しか経たない裡に妻と云ふ位だからね、僕等一年ばかり恥かしくて云へなかつたものだよ、それを斯うも平氣で云ふんだから餘程妻君に自信がなくちや兎ても、ねえ君」

「オイ、オイ、参つた、参つたてたら湯淺君」と中屋君大分痛められて御座る。そこで己れは審判官になつて、

「兎に角中屋君の妻君の方がヨリ美人だと判決する。

理由

第一、貰つて未だホヤ／＼、充分に活動の餘裕があること。

第二、音に名高き李枝子夫人と血縁たること。

第三、中屋君は古來より品行方正を以つて鳴りしを以つて福音遂に今日あらしめたこと。

どうだ恐れ入つたか。

「恐入つた判決だなア」と頭搔き、

「君等に向ふと協はんよ、殊に西川君は幾年振りで逢つたか分らないのに、會ふか會はないのに此の筆法で己れを意地目るんだもの、奥野他見男先生もう許してくれ」

「ウハツハ……」

「ウハツハ……」

己れは時々もう時間が時間かと思ふては時計を出して見るので、湯淺君、

「君、どこかへ行くのか」

「ウン、今から伊東へ」

「伊東へ？ 何時に」

「もう品川まで卅五分しかない」

「もう十分話して行け、自動車を飛ばせろ。僕も明後日さいべりや丸で米國へ

行かなくちやならんので君と逢ふのが之れ限りだ」

「え？ 米國？」

「ウン紐育へ」

「旨いなア」

「君も一遍行つたら何うだ？」

「行きたいと思ふてゐるんだけど。いゝことがあるぜ米國へ行つたら」

「そりや」と急に湯淺君ニコくした。己れも中屋君も何を思ふたか、矢つ張

りニツコリ。

「君、君、中屋君」と己れは時間が時間だから其の話をへシ折つて、

「君の郡長は面白かつたろ」

「郡長？ウハ、、、、今で君の筆法で行つたら君の書いた大學出の兵隊さん位の材料はあるよ、此處書生さんでも一度は郡長だつたからねえ」

「だから面白いんだ」

「天機時に或は君に話すこともあるよ」

「一遍聴かせてくれ」と云ふが早いかグルリツと又湯淺君に向き直り、

「オイ素敵なことがあつたら通信たのむ」

「よしツ」と云ふ彼の返事をるが早いか、今度は又中屋君の方へ急がし相に首を廻らしながら、

「君二十五日まで滞在？ さうか、それちや僕二三日裡に歸つて来るから又逢

はう、安宅君と三人で、いゝか、確かに。

それちや諸君失敬」と云ふが早いか突然帽子を持つて立ち上がった。

「オット待て西川君、新しく著者が出来たら此處へ、一寸待つてくれ」と云ふて急がしくポケットから手帳を出して紙を千切るが早いかスラ／＼と宛名を書いで、

「此處へ送つてくれ、頼む」

「よしッ、ぢや失敬ッ」

「失敬ッ」

上品な少女が

それ遅くなつたら品川に待ち疲れてゐる妻や子は涙をフツ飛ばして怒鳴り喚くことだらうと思ふて、駆ける様にして昇降機に近づき、あはたゞしく呼鈴を押すが早いか、ヒラリと乗つて、下りて又一目散。白木屋の前に立つて空いた自動車がないか、来ないかと眼を皿の様に物色したが、折も悪しや一臺も来ない、時計を見ると廿五分しかない。詮方がないそれぢや市街自動車で行けと突然そこにあつた自動車に飛び乗つて、品川へ行くかと尋ねると、これは新宿までと途方もないことを云ふ、アレーと又飛び下りて、えゝッ、えゝッとい

まゝし相に氣を焦々させながら日本橋方面から若しや空いた自動車がと見たが矢つ張り駄目。

すると恰度今しも品川行の電車が發車しやうとしてゐる、どうでもなれと許り無二無三に追つ駆けて飛び乗り、ホツと一息して時計を出して見るともう廿分しかない。駄目だと思はず慨歎の叫びを上げ様としてハツと氣が附いた。

新橋から乗つて行きや差支へがないのだ、白木屋の前から新橋までは直ぐだ、十二三分で行ける。さうすればあの汽車はどうせ新橋で止まるんだから其れに間に逢へばいゝ、それにしても其の新橋までが間に合ふか何うかと時計と首つ引きの體たらく。而かも立つたり坐つたり、氣が氣でない。それを車掌早くも悟つたか、

「どこまで被居るんです？」と到頭訊いた。

「新橋まで、もう十分間で行けませうか」

「十分！」と自分も時計を出して見て、

「行けませう」と、ませうと云ふ覺束ない安心力だつたが、直ぐ又、

「なアに大丈夫です」と今度は断定ある福音を此の己れの耳に聽かせて呉れた時には何處に嬉しかつたらう、もうスンデの所で「君、握手ッ」と出さうだつた。

幸ひ直ぐ前へ走る電車は満員で而かも乗降が非常に烈しかつたが、此の電車は乗客も少なく又乗降も無かつたので何等の停車なしに快い許りに走つた。新橋ステーション前で下りるが早い、息セキ駆けつけ、切符も夢中で買ひ草駄天の勢ひでブラットホームへ駆けつけると、あゝ幸ひなる哉、運とは全く之れだ、恰度そこへ列車が轟と入つて來た瞬間だ。早速乗つたかと思ふと直ぐ發車!! けに貴重なりし一秒かな。

品川へ着く頃から己れは首をヌツクと突き出して用意怠らなかつた。聽てブラ

ットホームへ引きさられる如く列車が進行して行く、早くもボカンと眞蒼になつて憤慨の形相恐ろしくブリ／＼してゐる妻の姿を見付けたものだから、

「オーイツ、妻ッ、オーイツ此處だッ」と己れは聲高く叫びつゝ手を高く翳して聲を限りに呼んだ。早くも之を認めた妻は、

「あれ、あれ、あすこへ父ちやまが」何が何やら呆としてゐる愛嬢静子を握つてゐる手をグン／＼させて注意し、突然それをもどかしと許り小腕に抱えて一散に己れのゐる列車へと駆け込んだ。それが非常に慌てゝゐるので髪は俄かに亂れ、自慢の手下袋は空に躍つて二ツ三ツ何やら飛び出た。

息セキ乗込んで、突然他人目もはゞからず、

「貴方つてたら、貴方つてたら」と泣聲を出しながら、「どんなに私は心配したかシクン／＼」と憶みが嵩じて遂に聊か涙聲に變つたので、

「何も云ふナ、分つた、分つた」と他人前で旦那さまの威嚴を損ぜない範圍で、

平謝りに謝りながら、

「あ、好かつた!!」と始めて大きな安堵の呼吸をする。

「どうして遅れたんです!」

「實は幾年振りと云ふ珍友に偶然逢つたものだから。」と云ひながら、早くも豫防が肝心だと許り「心配したろ、氣をもむだろ、氣が氣でなかつたら、無理はない、この己れだつて其慶事されたら腹が立つさ」と大に同情を扱々として注ぎ、心頭に燃え立つ怒りを、懸命になつてなだめて遣つたので、漸つとのこと、

「まア乗れたから何は兎もあれいゝ鹽梅だつたわ」と云ふたのを機會に之れ幸ひと許り、

「静ちやんいゝ子だ、いゝ子だよ、これボツボ、汽車だよ、ボツボの汽車と云つて御覽」そんなこと云ふて旨く胡麻化し、

「アレ、アレ、ふね、舟が見えるでせう?」

「ふね」と子供は嬉し相に、

「かアちやまよツ、ふね、ふね」と連呼して返事をうながすので、母アちやまも子供には罪がないと許り、始めてにつこり笑つて見せて、

「おふねよ」

「おふね?」と静子が訊き直すと、

「えゝおふね、父ちやまは舟と仰有つたけど、ふねぢやありません、おふね」と云つて聊か父ちやまを當て擦つて一本参つたさせ、己れが苦蟲つぶした様な顔をしたのを見て、先づ之れで一寸ばかり敵打ちしてやつたと云ふ様な快心の笑を浮べて、それから機嫌が直つたので、先づくゝいゝ鹽梅だつたと人知れず横を向いてニヤリ。

全く始めて汽車に乗つた子供の眼のあたり見るもの聴くもの皆初めてなので其

の上機嫌さてない、いつしか其れに釣り込まれて先刻までお互に目の玉變へて應酬してゐた僕等二人の夫婦は何時の間にか笑顔を作つて「ねえ貴方」と來れば「なアんだい」と優しいこと、優しいこと、忽ちにして濃厚な夫婦振りを發輝して大に近隣をして指を啣へさす。

茲に大變な失敗を演じた。それは此の汽車は横須賀國府津行であることを旅行案内で知つてゐたので之を選んだのだ。だから此の汽車に乗つてさへるたら國府津まで行くものだと思つた。斯う確信してゐたんだ。

所が大船を過ぎて次に鎌倉へ來た。オヤ此の汽車は鎌倉へ來るのか知らとコクリと傾けたが飽く迄國府津行を信じてゐた僕は落着拂つて悠然としてゐた。次に又返子と云ふ、オヤ此前國府津へ行つた時には返子は通らなかつた筈だがと思ふてゐる裡に發車して今度は田子々々と云ふ、ハテ變だ哩と餘りの不思議さに窓から首を出して見た。船が澤山ある。こりや怪しいと、折柄そこを通つた

車掌に、

「國府津へ行きますね」と訊いた。

「國府津？ 國府津へは行きませんよ、國府津行なら先刻の大船で乗換です」と、膽つ玉の飛び上る返事だ。

「ヘーン!？」

「この列車は二つになつてゐたんです、横須賀行と國府津行と。國府津は大船で切れたんです、後ろの方の列車にお乗りでしたら好かつたんです」と云ふこりや大變と慌てフタめきそれツと唆かしてあつべら顔の妻と無邪氣に遊んでゐた妻の二人を急遽下ろし、續いて己れも「馬鹿見た、馬鹿見た」と云ひながら下りた。

そして誰れ一人ゐないプラットホームに悄然として佇むだ。

「馬鹿ね、貴方知らなかつたんですか」

「ウム」と大に振はない。

「調べてなかつたんですか」

「ウム」と愈々振はない。

「汽船の時間に間に合ひませんね」

「ウム」と益々振はない。

先般知人鎮目桃泉さんから寄贈を受けた伊東案内記に依つて見ると、其の追白の欄に今年七月から伊東丸と云ふヨット汽船が朝の十一時と夕方の六時に國府津を出ると書いてあつた、その夕方の六時發の間に合はず豫定で汽車に乗つて來たんだ。そして國府津へ着いてから少し餘裕があつたらいと云ふので五時國府津着の積りであつたのだ。然るに今斯うして飛んでもない方面へ引かれて了つて、再び大船まで戻され、そこから又國府津行を待つてゐたら兎ても間に合ひ相でもない、然し急行だつたら或は辛くもと云ふ危ない所で六時に間に

合ふかも知れなかつた。兎も角大船まで行く汽車が早く來ればいゝ、それでなくちや何う見當つけるにも見當の附け様方法がなかつたんだ。妻も己れも淋しい遣る瀬ない顔をして唯それを待つた。

折節幾百人と見る職工が群をなしてブラットホームへ入つて來た。彼等は一様にジロくくと多數を恃んで我等三人の顔を覗き見た、中には騒いでる奴まである。

待つこと七分、漸く汽車が來た。二等の室は三人限りで占められた。發車間もなく大雨は豪然として降りしきつた。

「この雨ぢや兎ても今日汽船は出さうもない」と己れは空を見上げながら云つた。

「夕雨ですよ、直ぐ晴れますよ、夕雨の晴れた後は却つて風ますからね」と妻はそれに反對した。

「夕雨なもんか、屹度降り續くよ」と其の反對が癢に障つて聊かムツとした調子で云つた、妻は黙つて了つた、然し「いまに見て被居い、屹度晴れ上がりますから」てな顔付である。

鎌倉からはダヤ／＼と乗り込んだ、流石やつぱり鎌倉だわいと感心する。

やつと大船へ着いた。下りるや否や車掌に國府津の汽車は？ と訊ねると、もう一二分で急行が來ますと云ふ。我々は乗り過まつたんだからそれに乗つて國府津へ行つてもいゝだらうと訊くと、そりや不可ません、急行列車だから急行券をお買ひなさいと云ふ。ツイ大船から國府津まで卅分かそこいらである。それに急行券は馬鹿らしい骨頂だ。ぢや其の次の列車は？ と訊ねると、十分お待ちになればと云ふ。どうせ汽船に乗り遅れるらしいんだから、それぢや其の列車を待たうとなつた。

急行列車は直ぐ來て直ぐ出た。果して十分後今度は普通列車が來た。それに乗

つた。そして斯う云ふ虫のいゝ段取りをした。

それは去年の暮伊東國府津行の汽船が恰度一時間許り遅れたことがあつた、己れは其の時「時間不勵行なのか」と怒鳴つた所、汽船は汽車の様に正しく行きます、大抵は遅れるのが相場ですよ」と答へられて、その上叱れもしなかつたことがあつたんだ。

今それを思ひ出した、そして此の雨だ、屹度若し今日汽船が出るんであつたら矢つ張り一時間位遅れるだらうと思ふた。今はそれを唯一の頼みとして粟よくば其の運を掴むよりか外に途はないと思ふた。然し大方この雨だもの、多分は出まいとも高を括つて見たりもしてゐた。

その裡一天急に晴れあがつた、妻はそれ見ると云ふ顔をした。すると又曇り、又ザーツと云ふ篠突く雨だ、今度は己れが急によるみがへつた様に其れ見ると云ふ顔をする、二人は無言で自分の確信の争ひをしてゐた。

その列車の二等室は満員であつた、一人の親父が素知らぬ顔して我物顔に敷布を敷いて寝た振りしてゐたのが、子供を抱いた己れの眼にムカ／＼ツとした。矢庭に駆け寄つて、その厚顔しさを吐する様に「此處少しあけて下さい」と命令する様に云つた、何か云つたら大にやり込めて遣らうと己れの唇は少しく震へてゐた。親父は澁々座り起きた。そしてチロリと己れを喰しい眼で睨む様にした、己れも「ナニ糞」と許り睨みかへした。

「オイ此處へ座れツ」と己れは妻に命じた、妻は氣の毒相な顔して子供を己れから抱き取つて氣兼ねい／＼割り込んだ。先刻の列車には氣持のいゝ笑顔を持つた上品な少女の姉妹が三人も向ひに座つてゐたが、此の列車に此の親父。唯無暗にムカツ腹が立つ。蓋し乗り遅れた鬱憤が大部分ある。

☒ そつと口を耳元へ寄せて

國府津で下りて、驛前の待合室へ入り、そこにゐた女中に「伊東行のヨット汽船が出たか」と何より先きに尋ねると、「え？ ヨット？」と妙な聲して、

「其廢物はありませんよ、汽船のお間違ひでせう」と云ふ。

伊東案内記にあれ程確かに載つてゐたんだから此の女中或は知らないのかも知れぬと思ふたので、試みに傍にゐた男衆の肩を叩いて訊いて見た、すると矢張り「ヨット汽船なんてありません、汽船なら一日一回十二時頃に出る切り、しかも其れは昨日も今日も波が荒いので出ないでゐます」と取りつく島もない返事だ。それぢや汽車を幾程乗り過ぎたつて要するに國府津着が遅れた許りで結局同ンなじことだ。慌てる必要は少つともありやしないまア急行に乗らなかつただけ大助りだつた。

急行に乗つたわ汽船が出なかつたわとあつて見い、もうスンでのごとで泣面に蜂と云ふ無残の體たらくだつたのだ。

「オイ、どうしやう、ヨット汽船なんて無いんだ相だ、矢つ張り汽船ばかりだ
汽船も今日(けふ)は出ないんだ相な。出ても十二時(じ)ちやどうせ駄目(た)だつたのさ」と投
ける様に云ふ。

「どうしませう」と妻は鬼界(きがい)が島の俊寛(しゅんくわん)みたいなきを出す。

「ま、仕方がない、それぢや此處(こゝ)で今日は泊(と)つて明日(あした)行くことにしやう」

と、二人は面白くない顔をして、葛屋旅館(つたやりやど)へ入つた。通された部屋(へや)はあんまり
綺麗(きれい)でもなかつたので、ブーンと脹(ふ)れて「何だ此(こ)の部屋(へや)は」と鬱憤(うつぷん)を飛んだ所
で洩(も)らしたので「え、直ぐ隣(となり)が空(く)きますから少々(せうじやう)我慢(がまん)して下さい」とある。

碌(ろく)に部屋(へや)へ足(あし)も踏(ふ)まず欄干(らんかん)に倚(よ)つて眸(ひとみ)を大海(たいかい)に走(は)らす、ツと眼下(がんか)に大波(おほなみ)は
砂(すな)をズーツと白く染(そ)めては又返(またかへ)し、又染(またそ)めて行く。或程(あるほど)平坦(たいへん)な太平洋(たいへいやう)も今日は
白濤空(はくたうそら)に躍(た)つてゐた。海(うみ)と云(い)ふものを始めて見た子供(こども)は不思議(ふしぎ)相(さう)に「水(みづ)、水(みづ)」、
と叫(こゑ)んでゐたが「海(うみ)、海(うみ)」と教(おし)へて遣(や)ると、海(うみ)? と云(い)ひながら始(は)めて見た嬉(うれ)し

しさと驚愕(きやうがく)に暫(しばらく)しヂツと身動(みぶどう)きもしないで見詰(みづ)めてゐる。空(そら)は晴(は)れたり曇(くも)つた
り降り出(くだ)むしたり。

「どうぞ此方(こちら)へ」と隣室(となりむろ)の掃除(そうじ)が出来たのか、女中(ぢやうちゆう)は「済(す)みませんでした」と
モミ手をしながら物(もの)云(い)ふた。通(と)された其(そ)の部屋(へや)は此(こ)の家(いえ)一等(いちどう)の眺望(てうぼう)に好位置(かういち)を
占(し)めた場所(ばしょ)であつた。

先(ま)づ浴衣(ゆかた)に着代(か)へ、案内(あんない)されて湯槽(ゆがま)に行く、全(ま)で田舎(いんか)の風呂場(ふろば)の様(よう)に汚(きた)ない、
そして薄暗(うすくら)い、旅(たび)の第一(だいいち)日の印象(いんしやう)はもうウンザリ(うんざり)させられた。けれども其(そ)の夕
餐(いん)の旨(うま)さつたら無(な)かつた、肴(さかな)は全(ま)で動(うご)いてゐる様な新(あたら)しさだ。どれをつまむ
でも拙(ちが)いと思(おも)ふものは一つも無(な)かつた。

「ホンとに此(こ)の旨(うま)味(あじ)しいお肴(さかな)は始(は)めてよ」といつも食不進(しょくふしん)を潘(こぼ)してゐた妻(つま)は餘
程(ほど)旨(うま)かつたと見(み)えて片ツ端(はし)から平(たい)けた。

「東京(とうきやう)にゐたら逆(さか)しても此(こ)の旨(うま)味(あじ)しいのは喰(た)べられませんわ」と今(いま)までの總(すべ)ての

不快さは此の食膳一つの爲めに悉皆一掃されて、もう何等の不満もなかつた。あまりの旨さに一年振りで己れは酒を呼び、妻は又サイダーを注文した、直ぐ濱邊へ散歩に行く、十五夜の月はキラ／＼美しかった。其の夜、疲勞からか、馴れぬ夜具の故か、波のさゞめきに邪魔されてか兎もすれば轉々として夢は結ばれなかつた、何事にも不關心な子供でさへ幾度かスツクと起き上がつて家へ歸らう、歸らうと云ひ出した、圓かなまどろみもしない裡に空は白々とした。

見ると雨は矢つ張り止み相でもない、波は前日に増して凄く躍つてゐる。女中に訊くと勿論此塵日は汽船が出ませんと断定してしまふ。その裡妻は急に頭痛して來出したと云つて俯伏せになつた儘倒れて了ふと云ふ仕末。子供は「オツ乳オツ乳」と聲を限りに強請る。叱る泣く「私は具合が悪いから貴方がお守りして下さい」と、ウン／＼の裡から妻は云ふ。そして之れぢや兎ても苦しいから

東京へ戻りませうと云ふ、頭痛のするのは睡眠不足からだ、まア悠つくり寢た方がいゝと云つて己れは子供を抱えて濱邊へ行つた。波が躍つて迫る毎に「恐い、恐い」と静ちやんはブル／＼して獅噛み付いた。それぢやと云つて宿へ戻り、部室へ行かずに其の儘湯殿へ抱つこする。湯はまだぬるかつかつた。然し外に遊ばす方法もないからと云ふので、えゝ構ふもんかと許り、ツルツル眞裸にしてやる、そして湯の中で手拭で様々の藝當を凝らして時間を移す。斯くすること二時間、漸く出て部室へ來ると、妻は足音にキヨロンと眼をあけて、

「あゝ漸つと頭痛が癒つた、睡眠不足だつたわねえ」と云つて、

「どうしませう、今から」と云ふ。

「伊東行が駄目なら戻るより外はない、それとも箱根へ行かうか」

「箱根へ？ えゝ然うしませう、それがいゝわ」と大喜びで賛成の聲を出したが、直ぐ又「この雨ぢや何處へ行つたつて詰らないわ」と空を見い見い云ふ。

雨は瀧の様に降つて地面から刎ね上がつてゐる。ゴーツと云ふ凄しい勢で横さまに降りしぶる。

「暫らく形勢を觀望しやう」とゴロリとなつたが、何時まで経つても止み相でない。

「斯うしてヂツとしてゐちや詰らない、兎も角出て仕舞はう」と云つて、直ぐ仕度に取りかゝる。

「ちや今から箱根へ行くんですか」

「ステーションへ入つてからのこつた、東京へ戻るか、箱根へ行くか、突嗟の決斷で定める」

斯う云つて慌たどしく下女を呼び、トランクを階下へ運ばせた。勘定を済まして下りて行くと妻の下駄が見えない。「それちや矢つ張り今朝のお客が知つてゐて履き違へて行つんだ」と下女はブリ／＼云ふ。

今朝男女二人の客があつた、食事を済ますや否や直ぐ歸ると云つた。玄關に立つて「わたしの下駄を頂戴」と女は云つたので之れですかと云つて今眼の前にあるのを指した。すると「いゝえ違ひます、此方の方です」と云つて妻の下駄を指した。下女は變だ哩、昨夜確か此の下駄を履いて僕の妻が散歩に出られた筈だと思ひながらも、ツイ浮々と其れを並べた。すると其の女はそれを履くが早いか踴惶として男と手を引いて去つて了つたと云ふ。孰方へ？ その時試みにと訊くと小田原へ行きますと云つてた癖に汽車に乗つたらしいと下女は附け加へた「不都合なお客さんだわねえ」と、おかみさんは青筋立てゝ其處にある汚ない今しも切れ相な緒を見い／＼云つた。

「困つたわ、豈夫此塵泥々した下駄を履くのも厭だわ、どこか此の邊で賣つてないでせうか」と妻は下女を顧みた。

「まアーお氣の毒でしたわねえ、どうも濟みません、ちよ、一寸お待ち下さい

ませ」と云つておかみさんは奥へ駈けて行つたかと思ふと、直ぐ新しい下駄を手にして出て来て、

「奥様、濟みませんが之で我慢なすつて下さい詰らないんですけど」

妻は之を見て烈しく首を振つて、

「まア新らしいんぢやありませんか、宜しう御座いますよ、此座事されますと却つて此方が痛み入りますから」と、堅く固辭したが、到頭「まア、まア」と云つて押し付けられて了ひ「それでは」と云つて其れを履いて「濟みませんでした」と挨拶し「左様なら御機嫌よう、行つて被居いませ」と、多くの者から一時に浴せられながら、一人の女中と手代の二人に傘をさして貰つてステーションへ行く。

箱根へ行くにしても、東京へ戻るにしても最早伊東へ行かぬとなればトランクは邪魔になつて仕方がないから、之れ丈は送り返して仕舞ふとあつて直ぐ切

符を買つて預けて了ふ。

「行くか、戻るか。刹那はどう閃めくか。

「旦那、箱根へ被居るなら自働車を呼びませうか」と手代が横から機嫌を取る様に云ふ。そつと今しがた少々握らしたので、何か一つ忠義振りをして見せたいと云ふ量見らしい。突嗟己れは決めた。

「よしッ呼んでくれ」と命するが早いか、グルリツと妻を振りかへつて、

「オイ自働車で行くぞ」と云つた、妻は思はずニコツとした、子供は「自働車自働車」と足をトン／＼させて喜びを張り上げた。

自働車は早くも眼の前に横付けにされた。帽子を脱いでうやく／＼しく乗車を待つ運轉手に一瞥を呉れて三人ヒラリと乗り込むが早いか己れは天上天下我が物顔にフンゾリ返つて、自分が臍切つて始めて此座長距離殊に箱根通ひと云ふ紳名ある法外な値段で有名な自働車を何等の躊躇なしに雇ふたものだから、嬉し

くて堪らず、乗るが早いと思はず嬉しさに大聲あけて、

「君、オイ妻ッ、實に壯快ぢやないか、此處豪快な場面を須らく近所の人に見て貰ひたいものだなア、え君、君も然う思はぬか」と顔を覗く様にすると、妻は眼で烈しく其れをシツ／＼と制しながら、黙つて運轉手を指さし、密つと口を耳元へ寄せて、「私共は始めて自働車に乗つた様に思はれてよ、少つとも估券を考へて下さらないで直ぐ有頂天になつて了ふんですもの。」

己れは其れを聽いて慌てゝ悠然たる態度を作つたが、少し遅かつた哩。幾程然し豪然と構へても何も知らぬ子供は夢中になつて「父ちやま、自働車、自働車、うれちい、うれちい」の連發だもの、何んにもなりやしない。己れは百方子供の口を旨くあやつる爲めに「東京の自働車と此の自働車と孰つちがい？」 エッ？ 静ちやんと、運轉手に聞えよがしに訊ねて出来るなら一言でも此の運轉手の前で「東京」と云つて呉れりやいと親心一杯にして口元を見た

が、肝心の静ちやん其塵事に頓着なしに「うれちい、うれちい」と窓から首を出さうと懸命だ、ウンザリして了ふ。

己れは此の六月A商會の運動會が箱根に催された時、招待さるゝの光榮に浴して塔の澤へ來たのが抑々音に聽く箱根を知つた始めてである。その時或は長尾峠に富士の秀麗を仰ぎ視、或は強羅公園に晝寢と洒落れ、具さに感興の限りを盡した思出の多い旅であつた。それ故少くも經驗を持つてゐる。

妻は始めてだ、だから己れは一つは運轉手に對し、此の己れは年が年中暇さへあれば箱根へ來てるる身分だぞと云はぬ許りに知つたか振りに酒匂川で御座い小田原で御座い、こゝは箱根の入口で御座いと振り廻すこと、振り廻すこと。塔の澤はまだかと訊かれ、ツイそれ／＼あすこに家が見えるだろ、あの邊が塔の澤だと折角説明した其處が湯本であつたので、オヤ／＼とばかり眼をバチツカせたり、化の皮は片ツ端から脱けて行くので、仕舞には悉皆氣を腐らして假

寢を定め込んで防禦して下ふ。

塔の澤は新玉の湯の前で下ろされ、「部室があるか」と訊ねると、

「困りました」と主人は頭掻く。

「此處を頼りにして来たんだから是非都合して呉れ、己れはソラつい先達来たんだから」と髯面ヌツと突き出して、此の顔に覚えがないかと許り。

「それぢや茶の間で一寸お待ち下さい、直ぐ御出發になる方がありますから」と云ふ。ヤレ／＼と重荷を下ろした様な氣で登り込んだ。

さア妻は一つとして氣に入らざるは無い、國府津の宿とは違ひ、部室の美しい景色のよさ、温泉のなめらかさ、客種のよさに此の上の望みは無いと云ふ満悦を示し、

「もう私も箱根へ来たと云へば他人に肩幅も廣いわ、感謝します、ねえ貴方」と云つて倚りかゝつて來ようとするので、己れは慌て、

「馬鹿ッ、何を云つてるんだい、後を見い、後を」と首で知らした。

其處には女中がニコ／＼して立つてゐたので妻は思はず氣極り悪さに少しく顔を赤らめて「オホ、オホ、オホ……」と一寸參つたらしい。

ピタリ／＼と逢ふ女中毎に「まアよく被居いました」と、なつかし相に挨拶して呉れるので、己れも全つきり變つた知らぬ宿に泊まつた氣は微塵も浮ばず、親味は家へ對して人へ對して油然と湧いて來る。

「まアお嬢さま、可愛いのねえ」と各自に争ふて靜子を抱いて機嫌を取つて呉れる、これら親として喜ばしさの一つである。

あゝ妻を迎へて三年、家族の旅と云ふ旅らしいのは之が始めてである。親子三人暢に心ゆく迄今日も明日も又次の日も、茲箱根塔の澤にあつて生の喜びを謳はむ哉。

箱根の滞在は可成り久しきに渡つた、眼をあける、湯に行く、歸つて見れば何時の間にか部屋は綺麗に片附けられてある。三階から階下へとブラ／＼とする又湯につかる、晝飯になる、ゴロリと横になる、菓子を喰ふ、夕餐が出る、湯に入る、二ツ三ツ繪ハガキを書く。聽てお床を伸べますかと云ふ、伸べて呉れと應ずる、お就寝みなさいと云ふ、オーと答へる、そして親子三人枕を揃へるいつしか黙る、目をあけると日はカーン。

それが温泉に於ける日課であつた、二日もあると悉皆飽いて了ふ、無聊に苦しむ。だから今來て今湯で逢つたと云ふ人が直ぐ又歸つて行つて了ふ。三日と滞在してゐるのが少ない、單調さに歸つて了ふのである。何よりも嬉しさは臥床に入る時であつた、それは湯のあたゝまりからであらう

か、夢一つ見ないでグツと寝込んで了ふ。

一體温泉なんか行つたら喰ふより外に楽しみなんてありやしない、口ばかり動かしてゐる、だから何時も満腹の體たらくだ、そしてゐて食事を採るんだから拙いこと夥だしい、而かも眼の玉の飛び出る様な値段だ、成程箱根へ來る者は昨年あたりから悉皆何不自由ない樂々とした人でなくちや來ないとあるが、成程と思ふ。逢ふ人も逢ふ人も相當な品位と應揚さを備へてゐた。何もない癖に豪さうに構へてゐるのは先づ己れ位なものだらう。だけど食事の濟んだ後を見たら一べんで化の皮が脱けて了ふ、何故ならば一口の品でも皿に残つてゐない腹が満腹であつても食事に食した品は、どうせ残した所が同じいこつた、此の儘下けられてボチに喰はれたりするなんて勿體ない、イヤそれより何んだかムザムザ下けられるのが惜し相に思はれてならぬから、少々我慢しても片つ端からドシ／＼平けて、濟んだあとは豆粒一つ残つてゐない、ちつとも育ちのいゝ家

庭の夫婦らしく思はれぬ。妻は兎もすれば大半を残して大に貴婦人振らうとする、それを女中の鐵瓶を取りに階下行つてゐる隙を覗ひ、早口で、

「君、喰ひたまへな」

「だつて欲しくないんですもの！」

「家へ歸つても兎ても此處旨いものは喰へないよ、我慢しても喰つておいたら何うだ」と入れ智意する、それでも箸を附けぬ時には「失敬、失敬」と云つて己れが分捕りして、又素早く皿だけ戻しておく、そこへ女中が来る、素知らぬ顔してゐる。下けて行く時は孰方も綺麗なものだ、よくも喰べられたと云ふ具合に一品も残さない。

「ほんとにお腹が空いて被居いましたと見えてまア氣持のいゝこと！」と女中は仰山相に云ふ、豈夫體面上、家では此處旨いものは喰べた事がない、残すなんて勿體ないこつたとも云へぬから、ハツハ……今日は腹が馬鹿に空つてゐた

などゝ體裁のいゝことを云ふ。だから女中は屹度食事毎に卅番の御客様程お腹の空るお客様は三千世界尋ねてもありやしないと思ふてゐるだらう。

僕等はまだ量見のいゝ方だ、量見の悪い奴になると、喰ひたいのが腹一杯でありながら、態と「此處拙いもので兎ても喰へやしない」

と、けなして勿體振つて見せる、此處奴に限つて家へ歸れば米が幾程だ、なんほだと大騒ぎする手合だ。中には又見榮坊に彼方も此方もチヨビリ〜ついて見て、あゝもう濟んだとイヤに上品振つて見せたがりがある、下けられた其の膳を見たら屹度、膳方は庖刀を逆手に持つて「コン畜生ッ、どやつか知らねえが折角此の腕で造りあげたのが拙いのか」と面白くねえこと夥だしい。

だから何も飾る必要なんて少つともありやしないんだ、膳が悉皆平けてあることは女中にしろ、膳方にしろ何處に氣持ちがいゝか分りやしない。考へても見ろ相模灘で漁師が命かけて捕つた魚を、運んで仲仕に渡して、それを又商人に

賣つて、商人は汽車に乗せ電車に乗せて旅館へ持ち込んで、旅館は慘慄苦心して料理に仕上げて、うやくしく客の前へ持ち出したわ、客がポーンと蹴るわボチがペロ／＼ぢや浮ぶ瀬があるかい。見榮も外聞も上品振る必要もないぢやないか、赤裸々になれ、無理にも大に舌鼓を鳴らす可きであらうが。家にゐて碎な物も喰はないでゐて豪さうな顔をするなツ。

箱根へ行つて氣持ちの好かつたのは夜具だ、敷布團を二枚も下へ敷いて上は絹布だ、フンワリ身體に障つた氣持ちの宜さてない、家にある銘仙まがひと趣が違ふ。夢がまどろかな筈だ。

絹布の夜具で思ひ出したことがある。

嘗て己れが學生から始めてセビロ服を着た最初、静岡の近藤家を訪ねた。すると奥さんは大變喜んでよく来て呉れた立派になりましたねえと云つて是非宿泊つて行けと薦めた、己れは泊つた。所が其の夜具が何んだかスベ／＼して兎て

も眠られやしない、幾度か身體がゴロ／＼とこぼり落ちて疊の上へのさばり出る。寢ようにも眠られぬ。到頭刎れ起きて、奥様あの夜具は何處か非常に身體がこぼつて兎ても眠られやしないから他のと代へて呉れと強請んだ、すると奥様は、「オヤまあ然うですか、貴方は今では最早紳士ですから、紳士待遇の爲めに絹布團を出しましたのに。それぢや取り代へて上げませう」と云つて、新たにゴツ／＼した木綿の夜具を敷いて呉れた、それで始めて氣が落着いてスヤ／＼と眠つたことがある。

いつ何處で習慣が附いたか、今度は何んとも云へぬ好い氣持ちだ、今では何んの小言もなしにスヤ／＼と絹布の中で眠られる様になつたと云ふことは始めて紳士の資格を得たと云ふことだらう。屹度静岡の奥様が之を聞いたら出世した表徴と云ふかも知れぬ。

之は外聞の悪い話だが全く僕の家つたら蚤がるるんだもの、盡せども盡せども

出て来るんだもの、イヤになつちまう、屹度毎年春の大掃除に掃除が出来ましたか〜と訪ねて来るお巡査さんに「え、悉皆済みました」と云つて其の癖、一つめくらない天罰と思ふてゐる。毎晩一匹でもチクリと刺したが最後、もう眠られぬ程神経過敏な己れには箱根にあつて待てど暮せど蚤の襲来がなかつたことも安眠し得た一つの條件である。

○ 何事もない平和な温泉宿にも一日飛んだ騒動があつた。

恰度己れも妻も湯から上がつてゴロリと横になつて大きな欠伸をした瞬間であつた、廊下をへだてた前室に當つて、部室も裂けよと許り怒號したかと思ふとバツと投げる音がする、ドツチャガチーンと皿の壊れる様な音が續けさまに起つた。何事だらう？ と己れはギョツとして首を擡げた、續いて妻も子も。子供は如きは恐怖に打たれて緊つかと母に獅噛み付いた。

「何うしたんだらう？」と己れはガバツと刎ね起きて、部室から出て見た。すると一人の女中と、慌てゝ駆け付けた男衆が黙つて其の部室を覗き込んでゐる許りである。己れも好奇心に打たれて足音靜かに近寄つて、通りすがの風を見せて覗いて見た。そこには太きな圖體の五十歳ばかりの赧顔の男が双肌脱いで骨逞ましい腕を張り上げて何やら怒號してゐる。肴は飛んで錯亂し、酒は疊と云はず机と云はず水の如くに流れてゐた。障らば障つて見よと許り其の權幕の荒さ。

「何うした譯だらう？」と斯う思ふて今しも飛び出て相手きらわす喧嘩を吹つかけて間敷き勢に恐れを爲して、己れはトン／＼側の階段から避ける様に下りた。

すると其處には多くの女中やら浴衣がけの客やらが何事が起つたんだらうと許り、半ば驚怖に打たれて三階を見上げてゐた。話を訊くと斯うだ。此の客は昨

夜着いた許りであつた、恰度部室が満員であつたから断はつた、すると己れは一昨年も此の宿へ來てゐるんだから是非泊めて呉れと云つて動かぬ先きかやと云つて無理に都合して此の部室へ案内した。すると彼は碌に座らぬ先きから酒を出せと云ふ、ガブ／＼飲んで藝者を呼べの、もつと料理を出せのと云ふ何事もお婆様大事とあつて仰せ畏まる。その裡夜も更けたから規則通り宿帳を持參して署名を願つた。その頃酔は可成廻つてゐたと見え、

「ナニツ、宿帳ツ、ば、馬鹿ツ、一昨年來たのに此の顔が覚えがないかつ」と大喝怒鳴つた、宿屋では日に幾十人と云ふ客を待遇てゐる、一々名を知つてゐる筈がない、而かも一昨年何千人と待遇てゐる、況んや一寸來た位の客の名なんか覚えてやしないだから其座無理なことを云ふものぢやありません位に思ふた、然し其廢事は噁にも出さず、

「ツイ、その込み合つてゐるものですから、悠くり思ひ出す暇もありませんから

恐入りますが」と恰度其の部室附きであつた此の家で一番老巧なお高さんが云つた。

「何ツ、ば、ばかつ」と、素破とばかり拳を躍らさむ勢で男は怒鳴り付けた。あゝ之りや酒癖の悪い男が舞ひ込んだものだとお高さんは早くも宿帳を引込めて、そして「さア酌ぎませう」と酒のお酌などで座を紛れさせた、その裡藝者が來た。

今朝、まだ仄暗い裡から「酒出せ、酒出せ」と叫び、ヤレ料理が拙いの、酒がよくないのと無理を云ふのみか、どの女中の顔も氣に入らぬ、此の座敷は何んだ、あの川の音が癩に障ると難題のあらむ限りを盡してお高さんを苦しめた。お高さんは此の家で一番古ひ一番年老つた女中の最古參であつた、之が外の女中であつたなら一二もなく泣いて丁ふんだけど、お高さん丈けはおびれもせず笑つて其の部室へ入つて言葉優しく巧みになだめた。それでも酒癖の悪い此の

男の氣には入らなかつた。お高さんは「困つた哩」と思はず顔を撃めた、何故なら若し此處酒亂の様が下の主人に聴えたりするものなら屹度「お前の待遇が悪いからだ」と思はれる、よしんば此方の云分が好くても孰つち道い、顔をされないんだ。だから一生懸命になつて女中の本分所謂客の機嫌を取り做す様に盡した。けれども其の客は何か云ひがかりを附けて粟よくば「勘定は要らぬから出て行つて呉れ」と云ふのを待ち設けてゐるらしかつた、然し苟くも宿屋として客に對し其處踏み付けがましい事は云へた義理では無かつた。

此の男は了ひには其れがもどかしさに猛り狂ひ、到頭今出てる皿と云ふ皿は手に取るが早いか發矢々々と投げ付けた、折悪しく其の銚子の一本が光り抜きにしてあつた屋根の硝子を微塵に碎いた許りか、破片はその階下にゐる男衆の頭に飛んで危ふく怪我する所であつた。唯に其れのみか紙に火を點けてポーンポーンと屋根を目蒐けてうつつちやつた。斯うなつたら最う一大事である。

吃驚して駈け上がつて來たのは第一に其の男衆である、續いて幾程慰撫めても慰撫め切れず遂に其の部室を外してゐたお高さんが驚いて駈け付けた。もう客だなどゝ生ぬるいことは云つて居られない。

「貴方、何をなさるんです？」とキツとして云つた。

「何をするツ！ 斯うするんだツ」と云ふが早いか残つてゐる銚子を取るが早いかパツと投げ付けた、危ふく其れを避けて、

「大概になさつたら可いでせう」と、情けない客もあるものと眼に涙を浮べて云つた。男衆は「此處客は」と迄云つて齒を喰ひ縛つた。

「おかみを呼べ」と男は怒號した、おかみさんは勿論恐くて來られたものぢやなかつた。何うすればいゝか手の附け様もなく途方に暮れてゐる所だと恐々ながら形勢を觀望してゐた女中の一人が己れに話した。

所へ主人が上がつて來た。ブリ／＼して、

「外のことなら客商賣で我慢もするが、火を放つとなると最早猶豫が出来ぬ
 オイ誰か警察へ電話をかける」
 女中の一人は直ぐバタ／＼と下りて行つた、チリン／＼とかけた。何やら云つ
 て「早くお願ひします」と云ふが早いか又上がつて来て「只今直ぐ参ると云つ
 てました」と復命した。ウムと主人は軽く頷つきながら、チロリと三階を覗み
 上げ「仕方がないツ」と舌打ちしながら帳場へ下りて行つた。
 突然アレーと云ふが早いか集まつてゐた女中は我れ先きにと逃げた、面白いも
 のでも見る様に暇な客の多くも「それツ」と許り押し合つて轉ぶ様に下りて行
 つた。見ると其の男は全身眞赤になつた肥えた身體を眞裸にしてドシン／＼と
 上から下りて来たんだ、眼は酒で血走つてゐた。
 「野郎、畜生ツ」と云ひながら、而かも足は確なものであつた、加之に眞に酒
 に酔ふてゐるのであつたなら此の心掛けが無い筈だが、彼は手拭で前を装ふこ

と丈けは忘れてゐなかつた。眞に酒に酔ふてゐないんだ！ 斯う思ひつゝ己れ
 は川の景色を見る振りして一人残つてヂツと様子を見てゐた。
 階段を下りた彼は「さア」さア」と云ひながら相撲取りの様な腕ツ節を高く翳
 し、一人で豪振つてドシン／＼と階下の温泉へ下りて行つた、之を見た浴客の
 面々、男と云はず女と云はずアレー助けてくれーと濡れた儘で這々の體で遁け
 出し、フウ／＼云つて「オー恐い！！」
 聴て浴し終つた彼は悠々と天下我が物顔に又あがつて来た、そして部室へ入つ
 た、恰度そこへ巡查がやつて来た。もう占めたものだ、斯う思ふててか巡查の
 後から大勢がドヤ／＼と附いて上がった、己れも勿論その一人である。
 「馬鹿ツ、畜生ツ」と誰れも相手がなから一人で怒鳴つてゐた男は、巡查を
 見ると急に黙り込んだ。そこを狙つてお高さんは入つて行つた。
 「貴方、お連れの方がお歸りになりますと云つて被居いますが、貴方も御一緒

にお歸りになつたら何うです？」と言葉巧みに薦めた、と同時に今まで何處に隠れてゐたのか連れらしい男が其れは迷惑千萬と云ふ表情をして、巡査の姿を見て急にグナリとなつた隙に乗じてノコノコ入つて行つて、「君歸らう、歸らう」と薦めた。男は一人でブツ／＼云つた。

巡査は若しやのことがあつたら突然組み付いて遣らうと思ふてか、手早く帯剣を外して身軽くし、ポケットを探つて捕縄の有無をたゞし、素破と云はゞ結び上げて見せるぞと云ふ権幕を示した。連れの男は流石に友人を縄目にかけてまで引致されるのを見るに忍びなかつたので、百方歸京を懇願してゐた。

一體此の連れの男は昨夜から彼が酒を飲み出した頃から早くも單獨で歸らう歸らうとしてゐたんだが、此の人に去られては三階の酔どれは幾日経たつて歸りつこは無いと云ふので宿屋では百方留めてゐたんだ相な。その男は酔どれの部屋から避けて始終ウロ／＼としてゐたんだ相な。今にして漸つと飛び出して來

たんだ。

到頭酔どれは歸ると云ひ出した、然し歸ると云つたものゝ折角立ちかけては又坐つたりして急に抄らなかつたが然し遂に立つた。

女中は早く追ひ出さなくちや遣り切れぬと云ふ鹽梅で強ひて笑顔を作りながら巧みに一歩一歩と踏み下ろさした、そして漸くにして玄關へと導いた。電話で呼んだ自動車は既に其處に待つてゐた。

男はチロリと四邊を睨んで、何か又そこで一波瀾起して遣らうと企らむだらしいが、其處に彼の一舉一動をキツと構へてゐた巡査の姿を見ると急にグナリとなつて、然し今の今まで暴れに暴れてゐたんだから、其の手前からでも少しは暴れて見せなくちや不可ぬとも思ふたか、下駄を履いた彼は又も自動車に乗る乗らんで業々しくすねて見せたが、それでも遂に乗せられる様にして乗つて了つた。

「コラ運轉手ツ」と坐つた彼は突然吐り付ける様に喚く様に怒鳴つた、運轉手は思はずピヨンと飛び上がった、そして「あゝ自分が来るんぢやなかつた」と云ふ顔をしたが、今更それも云はれず溢々ハンドルを握つた、ボチなんか兎ても出し相な面で無かつたから、さぞ其の面白くなかつたらう。

二人の女中は形ばかり見送りに出た。ブウと自働車がよろ／＼と動き出す。早い方もサツサと引上げて「あゝ之れで漸つと助かつた！」と一様に胸撫で下ろした。

「本當に旦那様は殊更部屋が前でしたので御迷惑で御座いましたでせう、済みませんでした」

と、流石はお高さんホツと安堵の暇なく早くも亦他客の爲めに勘辨つて歩くと云ふ仕抹、女中と云ふ商賣も並大低ぢやないが、お高さん見たいな老巧なもの得難いと己れはスツカリ感心して了つた。

部屋へ戻つて來ると、子供は恐い／＼と慄へてゐる、誰れが？ と訊くと黙つて今ゐた男の部屋を指さす。「もうゐないよ、歸つたよ」と云つて遣ると慌てゝ元氣付き、急に「父うちやま父うちやまよ」と云つて廊下へ引張り出した。

外には急に額に皺寄せた顔が無くなつて、皆座は晴れ／＼しく語つてゐた、時ならぬ平調を破つた此の騒動も、部屋々々では好い話題として、他人と他人とを結び付ける唯一のくさびであつた。

⊠思はず視線がピタリ！

時々己れは徒然の餘り子供を抱いて外へ散歩に出た、宿から近くに橋があつた橋を渡ると福住旅館が川にのぞむで位置してゐた、その福住旅館の隣が玉突場である、此の六月に來た時、夜十一時頃から谷山君や吉尾君や其他合せて總勢六人で押しかけて源平に別れて勝負したつけ、そして吉尾君の突き方が全で木

にあつて魚を求むる様な珍妙なスタイルであつたと手を叩いて笑ひ興じたつて其の玉突場の隣に菓子だの果物だの紙だの賣つてゐた。己れは子供が強請む度に其處へ連れて行つては何かと好きな物を需め與へた、一日に時として三度も出かけたので遂には其處にゐたコツテリ白粉を塗つた若い娘さんは悉皆己れの顔を覚えて、通りすぎる毎にニツと笑みを見せてゐた。或る日のことであつた、福住の前を通ると、

「オヤ旦那、いつ被居の？」と向ひ家の内から女の聲がした、大方人違ひだらうと思ふて通り過ぎ様とすると、

「モシ、あちら」と云ふ。己れのことかと振り向いて見ると、ヌツク白い顔が出て、

「まあ久濶」と云ふ。

「オー誰れかと思ふたら」と己れは急に顔を崩した、矢つ張り此の前来た時に

招んだ藝者の一人であつた。

「まあお嬢さまをお連れ遊ばして、悉皆お父さんだこと、オホ、、可愛いお嬢さんですね。お連れは」

「ウーム……」

「奥様御一緒、氣が利かないわねえ。ぢや又お目にかゝります」

「失敬、又逢はう」と云つて去らうとすると、

「オツと旦那、まだ話があるんですよ」と慌てゝ止める。

「ン？」と動いた足を又引留める。

「あの夢路さん御存知でせう、櫻家のさ、大變貴方に岡ッ惚れだとき、逢つて上げなさいな」

「な、なにを云ふんだ」と子供の手前一寸謹厳なお父さんになつたが、然し此の子供まだ何も解し得ないし、又その言葉が執方かと云つたら己れのオホツと

する耳よりな話だつたから、何を云つてゐるんだと云つたものゝ其の癖あとが聴きたかつた。

「どうしたと云ふんだい？」と今度は此方から其れとなくツ、いて見た。

「まアもう少し向ふへ歩いて行つて御覽なさいナ、犬も歩けば棒に當ることもありますよ」と云ふ。

「どうせ散歩して向ふへ行かうと思ふてゐるんだ」と、有の儘答へると、

「まアーしらつばくれて、チャンと打合せが出来てゐるんでせう、よッ、よッ」

「よッ、よッ」と、急に又一人の藝者、それも見覚えのある顔が新たに冷評しに出た。

「早く行つて逢つて上げなさいよ。」

「何を云つてゐるんだ、ハツハ……」と其の癖己れは知らずく指された方向

へ歩いて行つた。又橋がある。

その橋のたもとを偶と見ると、櫻家と書いてある。恰度玄關に之れも以前来たお酌が襦袢一枚になつて玄關を掃いてゐたのを見たので、「オイ君」と呼んで

「夢路姐さんゐるか？」と尋ねて見た。

「姐さん、ゐるわ」と己れの顔を忘れたのか不思議相。

「寝てゐるのか？」

「え、でも」と云つて奥へ駈けて行つたかと思ふと、二階からスツと白粉はけた蒼白い夢二の姿が現はれた。

「アラまア誰方かと思ふたら」と急にだらしない其の風に顔を赤らめながら、

「今起きたばツかし」と辯解しながら、

「何日ゐらしたの？」

「このあいだ」

「左様？ 少つとも知らなかつたわ。お嬢さん？」

「ウム」と己れは静ちゃん顔を見ながら答へた。

「貴方ひどいわ、嘔吐いたのね、この前お歸りの時に一週間の裡に屹度来るからと仰有つてゐたのに」と怨言始めて洩れた。

「ハツハ……」と己れは笑ひで胡麻化した、左様何時でも人の懐があたゝか
いものと思ふてゐるかいと頭を掠めて閃めく。

「奥様と？」

「ウム」

「三人限り？」

「ウム」

「何處に宿泊つて被居るの？」

矢つ張り彼處に？」

「ウム」

「わたし二時から彼處宴會に招ばれてゐるの」

「ぢや其の時又」

「何の部屋にゐらつしやるの？」

「何處でもいゝ直ぐ解る、失敬」

「左様なら」

暫く歩いて振向いたら夢路は矢つ張り此方に向いてゐた。

己れは何も此處所で藝者を引つ張り出す必要が無いんだ。惚れたの惚れられたのと、お父さんらしくも無いことを述べたくないんだ、要するに嘗て逢つた顔に、再び其の土地を訪ねて又相見ると云ふことは旅に出てゐる者に執つては何んとなく懐かしい氣持ちのするものだ。況んや己れは何んだ高が藝者にと云へば其れ迄のことだけ、此の夢路と云ふ女は此の前來た時家が貧困な爲めに無

理に藝者に身を賣らねばならなかつたので漸つと一週間前から座敷へ出た許りだと云つてゐた。道理で何處となく初々しい全で奥様と云ふ風があつた。痛々しや此の温泉で色々な客人の座敷へ出て、漸次純な心が荒れすさむで行くのかと思ふて、「氣の毒なこつた」と眞顔になつて同情してやつた。

「其塵に仰有つて下さつた方は貴方が始めてとすわ」と其の時涙を溜めて夢路は云つた。それが何時しか戀心に變つたと云へば變つたんだらう、己れは己れの口から此塵云ふのも氣極りが悪いや。

二時過ぎ、己れは何氣なく階下へおりると、先刻己れを冷評かした藝者が待ち構へてゐたかの様に、

「先程はお楽しみ」とにこついて、

「チャンと此の妓に聴きましたよ」と云つて櫻家のお酌を指す。お酌は又己れを見て、

「もう姐さん直ぐ来るわよ」と、まだ年齢が十四五の癖に一角の口を利く。そこへ生憎夢路君が入つて来たものだ。己れと視線がバッタリ出合ふ、他人前があるのでお互に外らして了ふ。

「オホッ」

「オホッだ」

と、イヤに氣極り悪がらせが連發される、女中までが面白がつて見てゐるやがる己れは湯殿へ難を避けて獨言で斯う云つた「妻が見たら一大事ぢやないか。」入浴つた許りだつたけど、場合が場合だつたので又裸になる、湯槽につかる。こ五六分、早くも上つて、そのまゝ縁側に出て金魚を見てゐると、

「全く久濶でしたわね」と何時の間にか夢路が遣つて来る。

「ウム」と返事して、

「どうだ君は以前から随分人間が變つたろ」と其れとなく當て擦つて見ると、

「いゝえ、少つとも。」と、己れから此麼質問の出したのを烈しく振つて云ふ。

「そりや結構だ、然し何うだかな」と態と疑はし相な口を利くと、

「貴方こそヒドいわ、今度は何日被居るの？」

又己れを財産家みたいなことを云ふ。

「又來る」

「いつ」

「何日か分らない、分らない所に妙味があるんだ」と我れながら旨い答辯をする。

「父ちやまーよ、父ちやまーよ」と靜ちやんが先刻から探しあぐんでゐた様な眼付をして飛んで來た。

「オ、よし、よし、これ金魚、金魚とまだ云へぬかな、金ト、」

「金ト、？」

「ウン、金ト、」

「大きい金ト、ね、父ちやま」

「お伶俐、お伶俐」と頭惱を撫で、かゞんでゐた腰を立て、

「ちや君失敬」

「アラさう？ では何れ又ね。」

これだけの會話で再會の二人は其れツ切り別れて了つた。己れは何等の情緒もない淋しい呆氣ない寧ろ相手の百年の戀が一時に冷却した様な冷かな態度であつた。家庭の人として來ると、斯うも人間が眞面目になるものかと自分ながら不思議に思はれてならない。世の中の男て表と裏は皆麼斯うしたものだ、自分で自分を標本にして呟やいた。

◇とゞろく想ひを包んで

「貴方、もう飽きましたから今日歸りませうか」

と、或日妻は斯う空を見い／＼云つた、何うしたことか箱根へ來てから一度も晴天らしい天氣にならなかつたものだから、己れが口癖に自慢してゐた強羅公園も底倉温泉も、富士の秀麗で見事な長尾峠の絶頂へも行くことが出来なかつたもので、妻は毎日々々空を眺めては晴れを祈つてゐたんだが、今日と云ふ今日こそはもう我慢仕切れないと思ふてか頭斯う切り出した。その時己れは寢そべつて繪ハガキと云ふ繪ハガキに片つ端から負け惜しみ文句を書いてゐた最中であつた。

雨はしめやかに、

風ひややかに、

糟氣は山をこめ谷をこめ、

道をこめ人をこめ申候、

これだから箱根は嬉しく候。

「歸る？ ウン歸つてもいい、歸らうか、ぢや直ぐ歸らう」と突拍子なことが好きな己れは直ぐ應じた。

「貴方みたいに左様に仰言つたつて。晩に立つことにしませうよ」

「晩？ 晩ぢや東京へ着くのが遅いぢやないか、待てよ」と云ひながら、傍らにあつた旅行案内を引寄せ、開いて見ながら、

「ウン三時五十五分國府津を出る汽車がある、之で行くと新大久保へ六時半頃に着く、どうだ恰度いゝぢやないか」

「ぢや左様ませう、わたし早速お湯へ入つて参りませう、最後のお湯へ」と最後に力を罩めて笑ひながら妻は直ぐ子供を抱えて下りて行つた。残された己